
一步先からヤミ【集えぼくらのあーるぴーじー】

ウドの大木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一步先からヤミ【集えぼくらのあーるぴーじー】

【著者名】

Z7809A

ウドの大木

【あらすじ】

さあ始まってしまった問題作、皆のネタ提供がない限り更新しない駄目作品、作者はこの試練を乗り越えられるか？

始めに読むと複雑な心境になる（前書き）

・・・・・
え？ 前書きが始まってしまったの！

始めに読むと複雑な心境になる

注意

この作品は、一步先から闇ミニアム記念特別作品であり、皆様の提供されたネタにより更新します。

多少本編を読んでいればキャラについては大概分かれます。なお、この作品が本編に影響するかどうかは作者次第です

ちなみに今の作者の心境

「やつほ~。ついに2000人突破だよヒヤッホ~。今からオホーツク海にダイビングだー。唸れ俺のコスモ」

3

作者に変わつて霞が御送りします

さて、今回のRPG編、一步先から【集えぼくらのあーるぴーじー】に踏み込む事が出来たのは皆様のお陰です。作者他、キャラ一同お礼申し上げます

さて、本作品はRPGです

魔法も出ます。
必殺技も出ます。

勿論モンスターだつて出ます。

そこで簡易説明

魔法について

魔法につきましては基本的に分かりやすい名前にします

例 ファイヤー、サンダー、アイス

次に名前の前にM、G等の記号がついた場合、威力が上下をせします

M メガ
G ギガ

魔法について面白いものが浮かんだら教えてください

「うわ～、離岸流だ～、たすけ

」

必殺技について

説明必要ですか？

「うわ～、流されるー。誰か本当にたすけ

」

モンスターについて

読んで字の如くです

敵です。味方になりません。多分

「がぼぼぼぼぼ・・・・・・・・・・

さて、本作を始めるに前に、キャラの職業について少しだけ教えます

大早加弥 格闘家

性格 楽しい事を皆で楽しむ。パシリ嫌い（最近薄くなっている）

先塚洗夜

シスター

最近気になること 何故か僧侶の筈なのに攻撃呪文を覚えたこと

大川深娜 魔術学教師、及び城守団隊長

最近出来たこと 召喚術で校長のズラを生徒にバラしたこと

以上です。

え？ 慎とか俺はって？

男の説明は別にいいんじゃない？

ほら、作者溺れ死んだみた

「D~~~~ie！」

海から鎌を手に飛び出す作者

「ぎゃー化け物ー」

全力で逃げる霞

全く霞は、人か死にかけたのに無視とは。後でぐーキックだ（足の指を内に曲げて指の第二関節当たりをぶつけるように蹴る技）

で、何処まで説明したかな・・・・・（読み返す作者）

あ、はいはいここね。

男子の説明ね、バス

それでは最後になりました。

私の作品は、皆様に支えられて成り立つております。

皆様が読んでくれたり、感想を書いて下さる事により、作者、ウド
の大木はウドの巨木位にまで元気づけられます
これからも、どうぞ宜しくお願ひが致します

ふう、

「お疲れだな作者」

おお靈か、いや一柄にもなく眞面目に最後を閉めるのは大変だよ。
やっぱ笑い必要かな」

「それもいいが仕事始まるぞ」「

え？ 仕事？

「これから毎晩ひたすらネタを考えてからケータイに打ち込む仕事
え！ ちょっと待って。 今日からいきなり！」

いやいや「冗談キツイよ靈

「冗談？ なに寝惚けた事を

パチン（指を鳴らす）

ザザツ（作者の両サイドに黒いスースを着た加弥と深娜）

な、なんだ君達は、わ、私は作者なんだ、本当に作者のウドの大木
なんだ。止める、引っ張るな、つうか二人とも強すぎ、ズボンの端
々を引っ張らないで、伸びる、伸びちゃうから

「慎、黙らせろ」「

ドフ（めり込む拳）

げえは～・・・・・

その光景を撮影し続ける先塚

「この見苦しい光景を全国に地デジで流されたくなかったらキリキ
リ働くんだな」

た、助けて・・・・・・・・・・・・

始めて読むと複雑な心境になる（後書き）

全く作者ときたら私がわざわざ来てやつたのにこんな態度とは。
いい加減にしないと後で酷いですわよ

何？第一話の第一声が私？

まあ、そうでしたら今回の件は不問に致しましょう。

今後気をつけなさい

約束せざる、これ常識（前書き）

はい、久々の作者です

今回皆様の前にあーるぴーじーを提供出来たことを嬉しく思います。
第一回のネタを提供して下さった御劍様、本当にありがとうございます。これからもよろしくお願いします

長いです。作者歴で一番長いです。

ごめんなさい。

（今でかくて眼鏡で多少筋肉のある作者はケータイに向かって土下座しています）

これからもよろしく！

約束は守る、これ常識

「私は欲しいわ」

地上の全ての生物の中で最も美しいと言われる羽

持つ者を永久に幸せにする伝説の羽

不死を与える秘宝

「私は不死鳥の羽が欲しいわ」

菊地お嬢様のワガママな思い付きが、いつも世界の欲望丸出しの冒険に者火を付ける。

なんたつて思い付きを叶えれば何でも願いを聞いてくれるのだ
注意、聞くだけではなく勿論叶えてくれます
さて、ここにも一人の冒険者が現れた

「お嬢様、今回も多数の者が志望しております。いかが致しますか
?」

上下をスーツでビシッと決めた20代の執事を担当する男は、隣の優雅に椅子に腰掛け長く艶のある髪を払う女性に話しかける

「いつもの様に上位三名でいいわ。一日後にバトルロワイアルを開催するわ。詳しい設定は全て任せるわ」

そう言って女性はゆっくりと目を閉じ眠りについた
男は深く頭を下げ部屋を後にする

「全くお嬢様のワガママときたら・・・」

執事は深い溜め息をついていた

さて、このバトルロワイヤルを開催される開場では、数百にのぼる参加者が欲望を叶えるため力の限り描写出来ないような乱闘を繰り広げていた

一部を書いて見ると

「オラオラー。お前の妹貰うぞこら〜」

「メグタンの為にも俺は戦うんだ〜（メグタンとは一次元美少女戦士である）」

「見ててママン。僕頑張るから

もう書けない

その中で恐ろしい強さを發揮している女性がいた

「何かしらあの女。今2・5m位の男を10m近く吹き飛ばしたわ

よ

「彼女は・・・加弥ですな。この町一の武道家との噂もあります」
そうこう言つ間に次々と犠牲者が増え

「お嬢様、上位一名になつてしましましたね」
「アレは人間ですか？」
勿論人間の筈です
だって人の血は紅いから

血の付いた拳を近くのぼろ雑巾みたいな名もなき戦士で拭き、一ツ

コリ笑う

「私の勝ちー」

訂正、人間の皮を被つた悪魔だこいつ

さて、殺戮者を応接間に通し、周りには屈強な男達が入り口を固め、嚴重な警備の中話は進められている

「さて、彼方にとってきて欲しいのは不死鳥の羽。はつきり言つて何処にあるといった明確な場所は無いわ。でも持つてくれればなんでも願いを叶えてあげるわ。それで、何が望みかしら？」

「えーと、広い土地と一軒家」

「？その程度でいいですの？」

聞方次第では殺意が芽生えそうです

「いいよ。後はあんまいらないし」

あつさりと承諾成立し、いざ暴れ・・・もとい冒険に行こうとする

「そうだ加弥殿、我々から一名仲間をお貸します。何があるか分かりませんので」

そう言うと一人の少女が奥から現れた。

一人は上下を白で統一した修道服を身に纏い、銀色に輝く杖を手にした少女

もう一人は上下を黒で統一した、分かりやすい魔術師の服を身に纏い、篝（掃く部分に真っ赤に染まつた鎌、持つ部分にはスイッチがある）をもつ少女

「深姫君と洗夜君だ。どちらも実力は中々だから邪魔にはならないだろう」

「あのー。私はただここを通つただけなんですか・・・」

「それは神の導きだよ」

「そりなんでしょうか・・・
一名民間の方でしたか

「深姫ちゃんに洗夜ちゃんね。よろし」

「姉様、何処だ！」

屋敷に響くのは若い男の声

衛兵A な、何者だ貴様わ！
うるせー姉様何処だ！ウラツ！

衛兵A グアツ・・・

衛兵C 取り押さえるーぬつ、必殺、

天使の咆哮

エンジエルハ

ウウ！

グホーーー！

屋敷全体が揺れる

「・・・・・・何事ですか？」

「あ・・・・・・忘れてた」

ここだ、この部屋から芳しい匂いが！

「変態が来たみたいね」

黒魔術師さんは第（危険物）を振りかざし、呪文を唱えた

「デス・アンカー（ポチつ）」

「オラーこの部屋ブルグアー」

入ってきた男は発射されたデス・アンカーにより吹き飛ぶ

「あのー、今の人生きてますか？」

「大丈夫だよ。あいつタフだから」

「知り合いなの？」

「うん、て言うか殺つてから聞くのはおかしいよ？」

すると吹き飛んだ男はボロボロになりながら歩いてきた

「姉様～・・・、やつと見つけた。酷いよ試合当田いきなり殴りか

かってくるなんて。さつき目が覚めた」

「ごめん慎、あんたがいると勝てるかどうか分かんないから」

「ヒテー」

二人は笑いながら小突き合ひ、徐々にエキサイトして

「今日こそ勝つてやる姉様ー」

「殺れるもんならやつてみなさい」

しばらくお待ちください

「では御武運を」

頭を下げる執事に送られ元気に出発した四人組

「さて、修理屋でも呼ぶか。いっそ建て替えるしかないかもな」

屋敷の真ん中には見るも無惨な爪痕が残っていた

四人組は町で冒険の準備をしています。

定番の薬草から毒消し草、他にも色々と買い込んで・・・・・

「買すぎるだよ姉様～。重いよー」

「慎君大丈夫ですか？」

「いやー勿論ですよ。これくらい」

馬鹿は使いやすいと加弥他一同思つていたに違いない

一時間経過

「さあ、そらそろ行こうかしら」

「ああ、その前にちょっと行きたことあるんだけど」
そう言つて指差したのは

『図書館?』

町一番の規模を誇る図書館

「ウセイ」

数十万と言われる程の蔵書を誇り、半分以上が永久保存史書とされるほどの価値がある

整然と並べられた本の山

本本本本本×四万位の本の山

その山の中、静かに本を読んでいるのは17歳の少年。男なんだが
髪が伸びてると女に間違われるときが度々あるのが今の悩みらしい

「霞いるー」

図書館での常識である

「静かにじよひ」

を盛大に破り勢いよく侵入して来た加弥

「かーすーみーいー」

いきなり頭をわし掴みにし、図書館から追い出す

「加弥、静かにしろ。何回も言わせないでくれ」

「だつてたまに奥で読んでもると来ないじゃん」

「お前が来ると周りの人々に迷惑をかける。ついでに早く

「明日の引きこもり」

返却してくれ。読者が多いんだ」

「ゴメン、味噌ラーメン溢した」

「今すぐ帰れ。10年ぐらい視界に入るな」

そんなやりとりを呆然と眺める三人

「加弥さん、この人誰」

深娜の質問に

「紹介するね、ここに司書やつてる霞」

「ここにちは。そちらの魔術師さんは初めてまし

て頭を下げる霞に習い深娜も頭を下げる

「霞、ちょっと聞くけど不死鳥のこと教えて」

「不死鳥？あの馬鹿お嬢様の思い付きのあれか。不死鳥、又の名前
はフェニックス。エジプトの靈鳥とされ500年生き、巣に火をつ
けて焼け死に生まれ変わる」

『成程』

「ちなみにエジプトはここから東に行けば着く。ただし歩きで四ヶ

月かかるし不死鳥が現れる保証はない」

「なー霞、なんかいい方法ないのか？」

「無理を言つた慎、ただですら伝説の鳥だ。精々エジプトの近くの
町で情報収集するのが一番の策だな」

「よし、じゃあ出発しよー」

霞の腕を掴む

『えつ？』

「行くよ霞」

「何言つてるんだ加弥。俺はここに仕事があるんだ。それに俺はお

前とか慎みたいな化け物バーサーカーではない。行くなら四人で仲良く行つて来なさい」

「行くよ?」

「イダダダダダダだ。切れる切れる、腕を雑巾みたいに絞らないで。出ちゃう。人の証の赤い液が出ちゃう」

真っ赤に染まる腕を抱き、震えながら

「いつも酷いよ加弥。前だつて必殺技の練習でサンドバック代わりに俺使うしあの時だつて……」

トラウマスイツチオン

蹲る霞を抱ぎ霞の家、小さく少し年期の入つたアパートへ向かう

更に一時間経過

町外れの森の中

「結局来てしまったのか。俺は無力だ」

頭を抱えながらトボトボ歩く霞を無視してウキウキしながら歩く加弥

「霞さんだつたかしら。彼方何が出来るの?」

「さん付けはやめてくれないか。馴れていない。ついでに俺は只の司書だ。戦闘は出来ん」

「ならなんで加弥さんは彼方をパーティに入れたのかしらね」

「本人に聞いてくれ」

森をひたすら歩くに連れ口は沈み、辺りは薄暗い闇に包まれた

今日の旅はここまでにして、キャンプすることに

「で、四人揃つて食糧はこれだけどころくな道具もなし。酷いな『誰かが持つてきてると思つて』

「うんうん。今すぐ帰つていいい?」

『駄目』

ひもじい旅だな
ええい仕方ない

「なら聞くが」このチームのリーダーは加弥だよな?」

「・・・うん」

「ではリーダー、今この状況をどう打開する?」

「えーっと・・・」

「この森には食べれる物と食べれない物と頑張れば食べれる物の区別は難しいぞ」

「うー・・・」

「今の食糧なら良くて一ヶ月。この森を越えれば腐敗の谷。あきらかに無謀だがどう打開する?」

「いじめないでよー」

「泣いて打開出来ると思わぬことだ」

「キヤラが違うよー」

「知つた事か!今は生き延びるのが先決だ。今から役割分担をするが異論があるか?」

『無い』

「では慎と加弥で狩をしてもらつ。狙つはイノシシ。最低でも一頭は仕留めてくれ」

「霞とチームがいいんだけど」

「俺は山菜に果物だ。見分けが難しくて間違えれば確実に腹を下すがそれでもいいのか?」

「行くわよ慎!」

「イエツサー姉様!」

現金なリーダーです。

「次に先塚と深姫、一人はこの場での警戒を頼む。野盗が現れる可

能性があるから見付け次第痛めつける

「霞君は一人で大丈夫ですか」

「成せばなる・・・筈。んじゃ行ってくる」

霞は草木を搔き分けながら奥へと進んでいった

火を囲みながら黙っている二人

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・・・」

最初に口を開いたのは深姫だった

「加弥さんが霞をなぜパーティーに入れたのか分かったわ」

「リーダーにピッタリだもんね」

「ええ、私達のチームは片寄った知識が多いのよ。それに比べて霞はかなり広く深い知識を持つてる。リーダーに向いてるわ」

「昔から霞君は本好きだからね」

「知ってるの?」

「うん。私もたまに図書館に行くからお互い顔見知りなの。加弥ちゃんはもつと前から友達だつたみたいだし慎君も加弥ちゃんが紹介したんだ」

「そう・・・良いわね友達つて。私には一人もいないから寂しい目で空を見上げる

魔術の才能が有るが故に家族から捨てられ、皆に避けられ、世間から虐げられた人生

「嫌になるわ。こんな寂しい人生

「ならもう寂しくない人生ね」

「何を言つてるの?」

「霞君なら多分深姫さんの事友達つて思つてるよ。後で聞いてみた

ら

いたずらっぽく笑い空を見上げる洗夜
確信に満ちたその表情を眺め、深姫は思つ。
果たしてそうなのかしら
それとも只の気休なのか

その日の夜は盛大な夜だった

一行は腐敗の谷を越え、密林を薙ぎ倒しながら一直線に東を目指す
途中モンスターに合づが見事なコンビネーションで切り抜ける

回想シーン抜粋

「おお、あれは定番モンスタースライム！」
「違うぞ慎、あれは『元課長戦士、佐々木ズライム』だ」

「何故元課長なんだ！」

「聞いてはいけない事情があるんだ。あ！やめる加弥！頭を狙うな
！」

「えいやつ（頭スレスレを回し蹴り）」「ぶわあ～」

「ああ、佐々木ズライムの頭が、頭が～」

「モンスター」どきに情けは無用よ。ファイヤー」

（ボヒュー）

「ああ、ズライムのぶわあ～って飛んでつたモノに火が。お前鬼だよ」

「とどめの正拳突き！（バフォッ）倒したー。ん？エン？しけてんなズライム」「大人の事情があるんだよきっと」

回想シーン2

「霞！なんだこのスライムの集団は！」

「ここは『リストラー地帯』と言つてズライムのテリトリーなんだ」そこには元課長戦士佐々木ズライムや元幹部阿部ズライム。さらに元部長山下ズライム、元社長、元専務、元サラリーマンなど様々なズライムかウジャウジャいた。

そして強い風が吹く度頭を必死に守つていた

「ねえ霞君、あのズライム周りから攻撃されてるけど仲間割れ？」

「違う。彼はきっと地毛だつたんだ」

久保田ズライムが倒れた後、群がる様に飛びかかるズライム

「ここは私の召喚術を使つわ」

『おお！頼もしい』

深娜は目を閉じ、呪文を唱える

何が現れるのかな。イフリーとかシブとかバハムーかな

「召喚！」

輝く閃光の中から現れたのは・・・・・

「セアカゴケグモ！」

皆も知ってる人気者のクモ。

ゴケグモ科、ゴケグモ属に属し、体長は雌約10mm、雄2~4mm。体は丸く黒色ないし茶色で赤色斑を持つものが～以下略

「氣持わるつ。何かデカイよこのクモ。10cmあるぞこいつら」

クモは次々とズライムに襲いかかる

「なんでクモ達は頭と髪の間にわざわざ入って噛みついてるんだい？」

「私に聞かないで。あくまで攻撃対象はズライムなんだから」

おや？三匹のクモが何やら相談です

おお、そこにズライムが飛びかかった！

すると三匹のクモはグルグルと円を描きながら巧みに攻撃を避け、

一匹のクモが頭の上のナニかを弾き飛ばす

そして光沢のあるドコ力にめがけて噛みつく

「ジユットストリームアタッ！」

虫の世界にも広がっているのです

一年戦争が！

回想終了

一行は小高い丘の上でテントを張つて眠つている。
今は夜中の一時を周り、空は月と星で輝いていた
今夜の交代制の監視は霞の深姫だつた
二人は意外にも黒魔術の話で盛り上がつていた

「俺も魔術は使いたいんだが契約の指南者がいなくてな。お陰で未

だにファイヤすら使えんのだ」

「契約を交さないと普通の人は使えないからね。私は出来たけど」「最後の言葉は自慢に聞こえるから控えとけ」

たわいもない会話だった

そんな時、最初の夜に洗夜に言われた事を思い出した

聞いてみようかな

ふと思つた

「ねえ霞」「

「なんだ?」「

「霞は私を友達って認めてくれる?」「

すると霞は声を忍ばせ笑つた

「今更だな。仲間って認めてなかつたらここまで来ていい。第一会つた時から大体は信用している」

「なんでよ?」「

「深娜は俺が頭を下げた時ちゃんと返した。最低限の礼儀が出来ている時点で俺は深娜を信じてたさ」

にっこり笑う霞は今まで会つた全ての人と違つた

お人好し過ぎだ

そう思つた

それから何日かしょくやくエジプトに着き、情報収集すること一周間、よしうやく手掛けを掴んだ

「で、否我の荒れ地に巣があるつて?」「

「そうだ。ただし慎、お前は来ない方がいいぞ。後加弥、深娜、洗

夜も「

『なんで?』

「否我の荒れ地。彼処は自我を否定、つまり欲望に動く呪いがある地なんだ。俺の欲は彼処で叶うことは無いから大丈夫だが皆は無理だろ」

『・・・・・』

押し黙る四人

「んじゃ、三日位したら帰る。帰つてこなかつたら・・・・・取り合えづ笑つといてくれ」

霞はそう言って宿を出た

宿を出た瞬間シャイニンググワイザー

そのまま20m位吹き飛んだ

「あ、か、霞君、息してない。心臓止まつてる」

「加弥さん、やりすぎよ。いくら何でも殺すのは」

「取り合えず心臓マッサージに人工呼吸だ！」

三人の乙女が息を飲む

「ここは聖職者の私が」

「いえいえ殺つた私が責任もって」

「彼方達には任せたら不安だから私がやるわ」

討論開始

その間に慎は近くの教会で蘇生（これはあくまでRPG…）

「慎、助かつた」

「いやな、あのままだと一時間は続くと思つて」

実際彼女等は一時間討論し続けていた

結局霞他一名のみ同行することになった。

否我の荒れ地に一步足を踏み込んだ時点で呪いの影響を受けるため、一步入つて何の欲が出るか調べた

慎の場合

「うおあーー。なんと芳しい匂いがー」
サボテンにダイビング

洸夜の場合

「そのー。か、霞くん、一緒に行こうよ」
赤面でうつ向いている

加弥の場合

「行くぞ霞ー。早くいこー。二人ですっといこー」
ある意味危険であった

深姫の場合

「・・・・・特に何もないわね」

霞と同じだった

結果

不服丸出しの加弥となんか落ち込んだ洸夜に転がり回つての慎に送られ二人は否我の荒れ地へと足を踏み込んで行つた

枯れた大地をひたすら歩き続ける一人
太陽の光は強く、容赦なく体力を奪う

「いやー涼しー」

「快適ね」

体力を奪う？

二人の周りには数個の氷の固まりが浮いていてかなり涼しい様だ
「ところで霞、あなたの欲つてなんなの？」

「俺か？仲間を失わない。俺一人なら何の問題もないからな。深娜はどうなんだ」

「私も似てる。最初の友達を失いたくないって事が」

「そうか。いい欲だ」

笑いながら前を歩く霞

いつの間にか自分も笑っていた

久しい笑顔だった

二日目の夜、ついに見つけた不死鳥の巣

不死鳥の姿は無く、月明かりの中、羽は月の光を反射し七色に輝き
巣の周りを照らしていた

その美しさに一人は一時目を奪われていた

「綺麗ね」

「ああ、世界一ってのも嘘じやないな」

そして手に入れた一枚の羽は重さを感じないがなにかしらの力を放
つているようだった。

「それはお前が持つててくれ。俺が持つてたら飛んできそうだ」

そう言つて渡された羽を大事にしまい、二人は元来た道を戻った

その羽を持つものを永遠に幸せにする

三日目の朝、寝袋をしまい、歩きだした深娜の頭にそんな言葉が響
いた

すると急に脚に力が入らなくなり膝をついていた

それ今まで何の問題も無かつたのに急に脚が動かなくなつた

「な、何よこれ」

「おい、大丈夫か深姫！」

前を歩いていた霞は急いで駆け寄る

「無理はするな。疲れが溜つてたんだろ」

「いいえ、そんなことは・・・」

「いいから少し黙つとけ。よつ」

「きやあっ」

すると霞は深姫をおんぶし、歩きだした

「な、何をするのよ霞」

「いいから休んどけ。倒れたら困る。今日中には荒れ地を抜けたいんだ」

流石におんぶをしながら歩いては汗が流れる
しかし霞は休むことなくひたすら歩き続けた
深姫も何度も降ろすように頼んだが降ろす気は全く無いようだつた
(まさか呪い?仲間を失いたく無い呪いのせいかしら)
ふと思つた深姫はそこで諦めた

仕方なく霞におんぶされながら帰ることにして、魔法で出来るだけ涼しい環境にして少しでも楽になるよつ思つていた

それと同時に思った

このままいるのも良いかもしねないと

無事帰還した一人を激怒しながら迎えた一人と笑いながら迎えた一人不死鳥の羽を手に意気揚々と帰路に着いた

町に戻つた一行はそこで別れ、各自の帰路に着いた

霞は真先に休んでいた図書館へ向かつた

「あ、館長」

図書館の前には初老が座り、ちらに手を振つた

「どうしたんですか館長、今日は定休日じゃ無いはずですか」

初老の館長は困った顔で

「実はなー」

屋敷に向かつた加弥は激怒した

「ああ羽？ もういりませんわ。幸せならいつでも手に入れる事が出来ますもの。ですので今回の件は無かつた事で」

そう言つて屋敷を追い出された

「・・・・・」

それはもう恐ろしい形相です。その顔を見た子供は泣きながらチビリ、老人は入れ歯を飛ばして氣を失い、若者は近くの果物屋に頭から突つ込んで氣を失う位怖い顔です

そんな時、町の共同放送から声が響いた

「加弥！ 慎！ 洗夜！ 深娜！ 今すぐ図書館前に集まれ！」

その声は霞であり、今まで聞いたことが無い殺気が含まれていた

すぐさま集合した皆は啞然とした
霞はありとあらゆる重火器を装備し、まるで一国に戦争を仕掛ける
様な格好です

「屋敷漬しを始める！」

高らかに宣言した霞

皆はやつぱり啞然としていた

「数々の暴挙を見逃してきたが今回は許さん。事もあつてこの図書館を国から買い取つて私物化しやがった」
ちなみに菊地財閥の総資産は国の約五倍以上と言われている
「確実にあの屋敷を落として図書館を取り戻す。その為に力を貸してくれ」

霞は加弥と慎の方を見る

「加弥、フェチ男」

「フェチ男ゆうな！」

「俺は今から悪になる。一人の拳は己の信念を貫く拳だ。己の信念
が許さないなら今俺を止める」

「なに言つてんのよ。私の拳は友達の為の拳よ」

「そうだぜ。仲間を助ける拳だ」

次に洗夜を見る

「洗夜」

「なんですか？」

「俺は今から悪になる。聖職者たる君は悪を止めるのが使命なら今
俺を止めろ」

「いいえ。私達聖職者は善惡以前に弱き者の味方です。彼方一人で
行かせませんよ」

最後に深娜を見る

「深娜」

「何？」

「俺は今から悪になる。友は友の悪を止めるもの。俺を友と思つたら今俺を止めろ」

「確かに友達なら悪事を見逃す訳にはいかないわね。でもね、私は今からする行為を悪いとは思わないわ」

霞はにつこり笑い

「ありがとう我が友。俺はこれより屋敷をぶつ壊す。今まで溜ったストレス発散しに。だから付いて来てくれ」

۲۶۸

それから数分後、屋敷一帯で爆発音や人の叫び声、一部狂喜の声が響いた

「あははははは、弱い、弱いわ。ここに衛兵はこの程度なの」
音速に近いパンチはパシッパシッつと軽い音をしながら衛兵を軽く吹き飛ばしている

「な、何をする霞！」

「友に犯罪を起させないためだ！」

弾倉を変え、他の衛兵に乱射する

弾が尽きると銃を捨て、ワインチェスターM1897トレントレンチガン（散弾銃）を正面玄関に向けて撃つ

破碎した戸を越え室内に侵入

「アナコンダ！」

「シキヘビ科ボア亜科のヘビ、世界最大のヘビで全長約9㍍以下略
「深娜、死んじやうよ衛兵！」

「大丈夫よ。死なない程度つて指示はだしたから。多分」
「多分は駄目だよ。ほら、その中年衛兵飲み込まれてるよ
「霞君、革命には犠牲はつきものなのよ。コメット」
空から無数の隕石が落下。次々と衛兵が飲み込まれていく
「この聖職者コニー」

10分後、屋敷は制圧された

「さあお嬢様。今すぐ全国民に誤つて図書館返せ！」

「なぜ私が国民なんかに頭を」

「黙れ小娘、吹き飛ばすぞ」

後ろではタンスを吹き飛ばす慎

加弥は隅の壁を壊し、衛兵を突き落とす

深娜は壊れた窓からセアカゴケグモを投下

洮夜は神に祈り、空から雷の天罰

「早くした方が良くな?」

「一番の悪魔は霞なのかもしない」

執事はそう思つていた

二年後

彼等は旅する魔王と称され村々で恐れられ、幾多の勇者が挑んだが
誰一人傷すら付けることなく泣きながら帰つてきて、半数が人間不

信に陥つたそつだ

「ちょっと深姫ちゃん、霞にへつつきすぎだよ」

「そう言う加弥さんだつて同じじやない」

「二人ともズルイよー」

「姉様ー。俺もませくいぐるひやー」

「あんまくつくなお前ら。暑いー」

旅する魔王は今日も歩いていた
旅する魔王はこれからも歩く

特に田舎は無いけれど

約束は守る、これ常識（後書き）

いかがでしたか？

今回の作品は作者も必死だったそうで、既に寝てますので霞が続けます

次的作品は妻様の作品でシリアルになります
これからもよろしくお願ひ致します

(作者の寝てる顔に濡れたタオルを乗せる)

した！時代か！時代が俺に嫉妬したか！

(第三回) 三月三日(第12回)

「ぐわあ——」

全彈命中！

次回から誰か書くのか離せない！

バヒタヒタヒタヒタヒタヒタ

絕命

私は邪魔にして出来損ないの復讐者（前書き）

やあ、久しぶりだね。会長だ
会長の前にスーパーをつけるとポイントアップだ
今回は麦様のネタだそうだよ。
私の名前の後に様をつけるとポイントアップすることを忘れてはいけないよ。

さあ、本編スタートだ

私は邪にして出来損ないの復讐者

王の首筋に当てられた銀のナイフ

王は間近に迎えた死に恐怖していた

奥歯は震え力チカチと鳴り大きく見開かれた目はナイフを持つ少年に注がれている

「あんたが悪いんだぜ。あんたが馬鹿な見せしめなんてしなきゃこんなことになりはしなかつたんだ」

少年の目には怒りと殺意が渦巻き、ナイフを持つ手に力が入る

あんたが悪いんだぜ

「なあ霞、本当に行くのか?」

「ああ、許せる分けないからな」

まだ朝日の登らぬ暗い村の入り口で一人の少年は立っていた

「でも成功しても失敗しても最後は・・・」

「関係ない。殺るだけだ」

そう言って霞は歩き出した

「霞、これ持つてけ」

少年は黒い皮の鞘に収められた短剣を投げる

「俺のじいさんの形見だ。殺るなりをつちり頼む。仇とってくれないか。俺の代わりに」

頭を下げる少年に霞は笑つて答える

「行つて来るよ村長」

その日俺は旅だった

俺の村は小さいけど平和だった
国が治める領土内で細々と暮らしていた
しかし国の王は重い税に加え見せしめと言ひ名田で条例の開始と同時に処刑が始まつたのだ

その時は運の無さに嘆いた

選ばれたのは俺の両親に友達の祖父

それから数年がたち、悪政は益々酷くなり俺は決心したのだ

あの王を殺すと

数日かけよつやく山を越え、近くの宿で食事をとつていた

「ねえ、そここの彼方

話しかけられ頭を上げるとそこには肩まで伸びた茶色い髪に俺と同じくらいの身長の女性が立っていた

氷の様な冷たい表情は無を徹しており、威圧を感じる

「なんだい」

「彼方旅人？」

「そうかもしれない」

すると女性は向かいの席に座り

「私の名前は深娜。旅についてつていいかしら？」

「な、何言つてんだ。あんたは。俺は忙しいんだから他を当たつてくれないか」

「今この宿で旅人なのは彼方だけよ。どうしても行きたい場所があるの。途中までいいわ」

「あのな、俺は自分の事で精一杯なんだ。だいたい行き先は何処なんだよ」

「それは言えない。いずれ分かるわ。それじゃ明日からようしく」
そう言い残し、深娜と名乗る女性は自室に戻つて行つた

「なんなんだよ全く！」

予期せぬ事態にテーブルを強く叩き部屋へと戻つた

無言で歩く俺の後ろを無言で付いてくる深娜

「・・・・・」

そんな状態が何日か続き、耐えれなかつたのが自分だつた

「あんたは何処から来たんだ？」

日も落ち、火を焚いて携帯食糧に火を通しながら、向かいに座る深
娜に話しかける

「私の名前は深娜よ。何処から来たかわ言えないわ」「
そうかよ」

無造作に渡す食糧を素直に受取り深娜は食べ始める

相変わらず会話の少ない一日だった

「しかし深娜、少しは手伝つたらどうなんだ。薪ぐらい拾つてくれ
よ」

「彼方一人で十分じゃない」

「あーもう、ああ言えばこう言ひ。少しは手伝わないと飯抜きだぞ」「
その時は自國に帰つて訴えるつもりよ」

「何処にそんな横暴が通じる国があるんだ・・・・・エルノアか」

「ええ、そうね」

「お前・・・エルノア出身なのか」

「そうよ。今帰るところなのよ」

エルノア

エルノア、エルノア、エルノア、エルノア

沸き上がる殺意

俺はいつの間にかナイフを抜き、地に突き刺していた
「貴様、エルノア出身なのか。貴様はあのエルノアの人間か！」

声を荒げ殺意の渦巻く瞳で睨みつける

その瞳を真っ直ぐ見据えながら

「ええ。私はあの国の住人よ。今から10年程前に国を出て今帰るところなのよ。王は優しくて國の人を大切にしてくれてたわ」

「馬鹿か！あの国は最悪の王が治める国だ。あの王の気まぐれが俺の家族を奪い、友の家族を壊しな原因だぞ。あんな王を生かしてお起きはない」

「でも昔を知る私達にとつては家族の様な方だつたわ」

「知るか！俺は王を殺すだけだ」

自分の荷物を掴み夜道を歩き出す

「あんたとはここでお別れだ。一度と会うことはない

ひたすら自我を抑え、振り向かず歩き続ける。俺にとつてあの王は敵だ

全てを奪つたテキだ

「知ってるかい兄ちゃん」

そこは古びた宿でエルノアまでの最後の宿で客はほとんどいなかつた

「何が？」

「エルノアが隣国に攻められてるらしい。守りに徹してるらしいが西門は落ちたらしいぞ」

「本当か！」

運がいい、西門から侵入出来るし混乱に乗じて王を殺せる

「おやじさん。いい情報ありがとよ」

そう言って少し多めに払い部屋へ戻る

友から貰つたナイフをゆつくりと鞘から抜く
銀に輝くナイフは鏡の様に自分を映す

「やつと来たんだ。復讐が…………」

握り絞めていたナイフをゆつくりとしまり、ベットに倒れ込む

明日は早い

コンコン

控え目に叩かれた戸

宿のおやじさんと思い戸を開ける

「・・・お前が。一度と会うことはないと言つた筈だが」

「お願いがあるのよ。王を助けて」

頭に血が昇るのが分かる

「いい加減にしろ。俺は王を憎んでいるんだ。その王を助けるだと

？冗談にも程があるぞ」

「冗談ではない。王は昔本当に優しい人だったのよ。あんな事になつたのも理由があるのよ。お願いだから力を貸して」

「俺は王を殺す。お前は王を守る。互いの願いを叶えることは不可能。ならば俺を今殺せばいい。ただしすみすみ殺されはしないがな」
再び抜いたナイフは真っ直ぐ深姫に向く

見つめ合ひ一人は動かず、ただ時間が過ぎていく

どれだけ時間がたつただろうか。最初に沈黙を破つたのは深娜だった

「分かつたは。貴方を止めはしない。ただ私を王の元に連れていつて。最後を見届ける人もいないなんて寂しいわ」

「邪魔をしないならいいさ」

そういうてナイフをしまい、またベットに倒れ込む

「明日は早い。早く休め」

そう言って目を閉じた。後ろでは戸の閉まる音が聞こえた
そして

ありがと

そんな声が聞こえた気がした

小高い山の上から見下ろしたエルノアは酷い有り様だつた
宿のおやじが言つてたように西は完全に制圧されており、小さなバ
リケードだけが西口を守つている。

その内東も落ちるだるう。そうなつては王が逃げる恐れがある

「今行くしかないな。走るぞ」

後ろにいる深娜の方は向かず、指示だけ出して駆け出した
曲がりくねつた獸道を抜け、西門まで来た。

西門は隣国の部隊が拠点を構え、次々と部隊が送り込まれている
幸いにも隣国の部隊は義遊兵で服装に統一が無いため、すんなりと

エルノアに侵入出来た

バリケードは一番手薄な南の方に向かい、物陰から石を投げ、注意が逸れた内に侵入した

「さて、後はどうやって城に侵入するかだ」

慌ただしい城では入れ替わり兵が出ているので流石にこの服装では不味い

「ここちに裏口があるわ。ついてきて」

やつ面つで駆け出した深姫を慌てて追いかける

そこは城の裏の角

深姫は壁を調べ、一つの口を押した

すると隣の辺が勢いよく開き階段が出てきた

「な、なんでお前がこんな道知つてんだ」

「昔王が内緒で子どもたちを城に入れて遊ぶ時があつてその時使つてたのよ」

「成程な」

階段を降り、暗い階段を抜け、梯を登るとそこは厨房の隅だった

「ここから右の階段を登つて倉庫の壁に隠し通路があるわ

「10年前の記憶がしつかりしていて助かるよ」

隠し通路を抜け扉を少しだけ開けると

「ええい、何をやつている。早く敵を排除するんだ」

王は側近を罵倒し近くの物を投げつける

「申し訳ありますん。しかしアクノラの兵は約15万、我が兵は既に8万を切つております。」ヒは体制を立て直す為に撤退するべきかと・・・・・

「黙れ。その様な醜態晒せる訳がないだろうが！」

王は顔を真っ赤に染め声を張り上げる

「それはそうだ」

笑いながら戸を開け放つ

「あんたは腐つてやがる。自分の事しか考えてない最低な奴だ」

「誰だ貴様！」

しかしその問には答える事なくナイフを片手にゅっくりと近付く
「あんたは最低だ。あんたは俺から全てを奪つた敵だ。あんたは友の家族を壊した敵だ。あんたは罪のない人の魂を葬つた敵だ」

「何を言つている。誰か、そいつを連れ出せ！」

「そいつは無理だ」

既に目の前に立つ俺は王座から引きずり倒し殴つた

鈍い音が部屋に響く

「これはあくまで知らない人達の為だ」

背中から引き抜くナイフ

光るナイフには恐怖に引きつる王と無表情の俺の顔が反射する

「あんたがいらない見せしめなんかしなければあるにはこんな事はしなかつただろうな」

ナイフを持つ手に力が入る

「あんたは最低だ。信じるモノも無く、信じられる事も無いあんたを殺す事に俺は何も感じない」

深姫はただ黙つて見ていた

相変わらず無表情でただ黙つて見ていた

俺はあんたを殺す事に何も感じない

ナイフからは黒血が滴り赤い絨毯を染めた

広い草原に座り光るナイフを掲げる

相変わらずナイフは光輝いていた

「何を思い老けてるのよ。霞」

「ああ、自分の気の弱さに嘆いてる最中だ」

「あの事?」

「それ以外にあるか?」

「いいえ」

滴り落ちる黒血は絨毯を染める

「霞……」

「だがあんたを家族と言つてくれた人を俺は知つている」

ナイフの刃を強く握り締め必死に抑える

「あんたの過去を知り、家族だと言つてくれている人を俺は知つて
いる」

ナイフは振り下ろされ絨毯に深々と突き刺さる

短い悲鳴を無視し、ナイフをしまう

「俺は今あんたを殺さない。次にあんたの前に立つた時、情けをか
けはしない」

溢れる血を抑えずその手で王の襟を掴み引き寄せる

「一度と俺の様な人を生み出すな

吐き捨てるよつに言い残し元来た道を歩き出した

部屋には王と側近、そして深姫だけが残っていた

「久しぶりね王様」

王は何も話さない

「貴方は命拾いしたわね。まさか霞が貴方を殺さないなんて。何処までお人好しで何処まで頑固なのか分からんわ」

王は何も話さない

「でも次は無いわ」

王は何も話さない

「貴方がなぜ変わったかは知りうとしないわ。今は少しでも変わることを考える事ね。それしか貴方には出来ないわ」

王は何も話さない

「ちょっとね、昔優しき王様。もつ金つこと無いわ

王は何も話さない

「なあ深姫」

「変わったわね」

「まだまだこれからやらなきゃいけないことが有るんだ。全て終わつて初めて変わるんだよ」

「そうかもね」

草原に吹く風は涼しく心地よい

その後王は降伏の旗を掲げ、自らの足でアクノラの拠点に向かい拘束させ、謝罪をしたそうだ

あれから数ヶ月がたち、ヒルノアに対する不満は徐々に払拭されてきているそうだ

「何?」「

「お前結局何者なんだ」

「秘密よ」

「そうかよ。まーじうでもいいか
大きく伸びをし、進行方向を向く

「次はどうするかな」

「次はヨカムタに行きましょう」

「はいはい逆らいませんよ。どうせまた反逆起きてる町なんだろ」
愚痴を溢しながら歩き出す霞と後ろで頬を緩めながら歩く深姫

これからもお願いするわ。平和をもたらす為だけの存在の私の付き
人さん

私は邪にして出来損ないの復讐者（後書き）

楽しんで頂けたかね？

私が出ていないのが不服だが私の心は広大で激しいから作者、後で覚えておけ

「麦様、最後の終り方が多少変わってしまった事をお詫び申し上げます」

作者、一度地獄を体験したらどうだい？

何故だ！何故水道の水を摺つたのにお湯が！
ああ、なんだこの蒸し暑さ！
し、死んでしま・・・・・・
飛来する筈

「かひゅつ」

他界

他人の事を考える。これ当たり前（前書き）

桜舞う季節となりましたがいかがお過ごしでしょうか。
この度突然の手紙お許し下さい

私この地区を担当している魔王ですが今回はお願いがありまして。
この地区一体に七つの魔石を放ちました。

これを一年以内に私のとこに届けて頂きたいのです。

冒険者は五人までとし。魔石はそれぞれ部下を配置しております。
大変唐突な申し出ですがなど良い返事を。それでは失礼します

追伸 魔石は一年過ぎると暴走しますのでお早めに

他人の事を考える。これ当たり前

国王はとても困りました

家臣も頭を抱えています

「王！いかが致しますか！返答次第では我が国が危機にさらされますぞ！」

「分かつてある。しかし五人の命知らずの冒険家などそう見付からんわ。少なくとも国民にそんな者はおらん」

すると大臣が何かを思い出しました

「そうだ。王！数日前に来た旅人に頼まれては如何でしょう？あの者達は丁度五人組で『旅する魔王』と呼ばれた者達ですぞ」

「そんな者達が来ていたのか！今すぐここに呼び出すのだ！」

「しかし彼等は三日ならぬ四日しか滞在しないルールを持っており、今日旅立つた筈です」

王は手元のレバーを引くと大臣の足下がパカッと開き大臣はまっ逆さまに落ちていきました

「早く旅人を呼んでくるのだ！」

もう王室には誰もいませんでした

さてさて、ギリギリ出国前だつた五人組は王様の前に座っています。
勿論椅子はゴージャスで、美味しいデザートも出されています
右から順に深姫、慎、霞、洸夜、加弥の順です

「実はな、カクカクシカジカなのじや
「意味が分かりません」

「霞の厳しい突つ込みです。流石魔王！」

「まあこれを読んでくれ」

渡された手紙をじっくりと読み、四人に解りやすく説明した

「カクカクシカジカなんだって」

『成程』

「何お前ら！わしの時は解らなかつた癖に！」

霞は手元のスイッチをポチッと押すと王様の足下がパカツと開き王様は目の前から消えた。

ついでに慎の席もパカツ

「なぜだ？・・・」

虚しい木靈だけが残つた

第一章 完

前回のあらすじ

台風の日にレモンの汁をおみまいした霞他愉快な仲間達は次の敵、カスタンネットのいらない様で実はかなり重要なゴムを口指し、旅立つた

嘘だよ？

さて、王様の『何でも願いを叶える』と言つ提案を採用し、意氣揚々と北の鉱山を田指して、いた

ついでに王様から軍資金を要求し、みんな装備が充実している

慎は竜の鱗で編んだ碧の武道着に虎と獅子の皮で編んだグローブを身に付け、相変わらず素手で通している

洸夜は白の修道服は変わらないが鉄の杖から神秘の木杖（道具として使うと回復できる）に変え、攻撃魔法も充実してきました。最近は精霊も召喚出来るようになりました

加弥は飛龍の皮で造られた朱と翠の武道着（ちょっと大きい）に、白のリボンで髪を縛っている。最近は新しく短剣の千角せんかくを手に入れ、益々狂暴・・・じゃないや強さに磨きがかかっている

深娜はと言つと見た田はあまり変化はないが、黒のローブは、暁の影と呼ばれる魔力を上げるローブで、笄は断罪の鎌（既に笄ではない）を装備し、全体的にレベルアップしている

最後は霞、正直服装は相変わらず司書の格好である。しかし戦闘能力は飛躍的に伸びた。まずは初級呪文の使用加能。深娜の契約下に

就いたので初級程度は扱えるようになつたのだ。さらに加弥から強引に武術を叩き込まれ合氣道に似た武術を覚えた。さらに負けじと洗夜が回復呪文を覚えさせた（魔術と違い、聖職者に就くことで簡単に回復呪文は得られる）。

おかげで中途半端なオールマイティーになつてしまつた

さて、鉱山を目指して進む一行。それを阻むモンスターの群れ！

意味があるかな？

仮にも旅する魔王と言われた彼等にとって、出てくるモンスターは新品の醤油等のゴムで出来たプルタブ並にゴミだった

鉱山東地区 ダイヤ発掘地

「掘るぞー」

『おーー』

早速泥棒です

掘れば掘るほどザックザクです

既に目的を忘れそうになつたとき、一人・・・・・もとい一匹の巨体が話しかけてきた

「あのー、勇者一行様ですか？」

「はい、そうですが貴方は？」

「申し遅れました。私、魔王第三部隊調理部主任のクロケットと申

します。こちらの魔石を賭けて勝負せよとのことで、クロケットさんの手には赤い石が納められている改めて見ると、クロケットさんは大きくて水色の体毛に覆われた狼みたいな人（獣）で、腰には中華包丁を下げ、中華鍋しようとしている

まさに中華の獣！

「一対一の勝負を希望したいのですがよろしいでしょうか？」

かなり丁寧な口調で魔王子分とは思えません

タイマンを受け入れ、相手をするのは我等がフェチ男！

マッスル慎・イン・ザ・チビ！

「武は礼節を持って接するべし」

フェチ男はいつになくマジメです

お互に深く礼をし、身構える。

クロケットさんはまだ包丁を抜かず、左手を前に出し腰を低く構え、全くなきを見せていない。

魔王配下だと改めて認識できる気迫だ

慎も握った拳を軽く前に出し、低く構えている。先程とあることを耳打ちしたせいか、異様な気迫を放っている

「何て言ったの？」

加弥の質問に笑いながら答える

「加弥の編んだ手袋あげるって言った」

最初に仕掛けたのはクロケットだった。左右にステップを踏みながら素早く相手の死角に潜り込み、慎の脇腹めがけて抜き手を放つ。しかし慎はバックステップで回避し、着地と同時に前へ飛び込み低い回し蹴りを放つ。

クロケットは跳躍し、後方に逃げるが慎は追い討ちをかけるようにソバットを叩き込む。

なんとか防いだクロケットだが予想以上に威力があつた為、バランスを崩し着地を失敗し地を転がる。直ぐに起き上がるが目の前には既に慎の拳が突き出され、顎に重い一撃が入った。人間なら当分は目が覚めない一撃なのだが仮にも魔族の一員、すぐさま後ろに飛び距離を取った

「流石は旅する魔王と呼ばれた勇者一行、強いですね」

口から流れる血を拭い、包丁を抜き、鍋を構える

「次は本気ですよ！」

言い終わらぬ内に姿が消える

地を蹴る音のみが周りに響く
不意に慎は体を右に傾ける

その瞬間左の腕に赤い筋が入り、黒い血が滴る

息を飲む三人をしりめに慎はギリギリの所でクロケットの速攻を避けている。しかしそうと傷は増え、碧の服は黒に染まつていった

しかし慎の目はまだ生きていた。血走る目は確実にクロケットを捕えていた

「まだ耐えますか？」

何処からともなくクロケットの声が聞こえる

「素晴らしい体力ですがそろそろ終りですよ」

クロケットの忍笑いが消えると同時に鮮血が空に舞つた

「全く恐ろしい人だ」

横薙に切りつけた包丁を素手で掴み、右手を握り締めていた。

「ギブミー加弥の手袋～～～！～！」

降り下ろされた拳は光を放ち、雷を纏つ

破碎音と共に落雷が慎の拳に落ち、凄まじい爆風が広がる

飛ばされないよう必死に堪える二人

しかし撃沈した霞は空を舞つていた

「参りました。私の敗けです」

胸が陥没したクロケットは赤い魔石を慎に渡す

クロケットは包丁を地に刺し、高らかに叫んだ

「我が王を楽しませてくれ魔王の名を持つ勇者達よーいつまでもその姿を突き通してくれ快樂の勇者達よー」

少しずつ霧の様に体が薄れしていく

「またいつか手合せをお願いしたいな

その声を最後にクロケットは空に消えた

「断わるー」

慎は断固拒否だった

さて、早速赤の魔石を手に入れた一同は次なる石を手出し旅だつ・・・

「ねえ、霞は？」

深姫はいつもいる仲間が不在な事に気が付いた

『えつ？』

『あー！』

・・・・・

そして我等のコーダーは爆風に乗つて、ぶらつぶらつ空の旅

一週間経過

「かーすーみーど」~~

加弥は半泣き状態で探し回り、洗夜はぶつかやけ泣いている

「ひつぐ、ぐすつ。かすみひつぐ、く〜ん」

深娜は相変わらずの無表情で探しているが、心なしが焦っている様

だった（慎談）

そして行き着く先は

「加弥さん、貴方が霞を殴らなきゃこんなことにならなかつたのに」

「何よ！ 倒れた霞の脇腹蹴つてた癖に！」

「結局一人とも霞君イジメてるじゃない」

「コウちゃんだつてさりげなく精霊使ってイジッテたじゃん！」

通算50回目

三人の喧嘩をよそに慎は崖の上から眺めている。

おやおや？ 遠くから何かが飛んできてるぞ？ 数にして三

徐々に近付く物体は鳥の様な羽が有ることが分かつた。そしてなんとなく鳥人間っぽい人（獣？）だと判明した

鳥人間ABCは慎の前で止まり

「我等は魔王に使えし第四アクロバット部隊責任者アトモラ三兄弟だ！クロケット殿を倒した腕、確かめさせて貰うぞ！」

そんな宣言を無視して未だに討論は続いている

「おい貴様ラ！聞いてるのか！我等は兄弟の持つ石が欲しくないのか！」

するとビタリと討論が止み、ゆつくりと三人の方に体を向ける旅する魔王三強

「やつと我等の話を聞くきに・・・・」

「あいつ・・・つるさい」

「邪魔よね。害虫よねゴミよね？」

「神に変わつて成敗ね」

惨劇だつた

落雷がアトモラ三兄弟を襲い、地面に落下

そして漆黒の鎌は容赦なく羽を切り裂き一瞬の黒炎で消し炭と化した
そしてまがまがとしたオーラを短剣に纏つた鬼はアトモラ三兄弟を
血祭りにする。

虫の息状態の彼等を最後に出迎えたのは地中より伸びる巨腕だった。
精靈グロウダムの腕は容赦の欠片も感じさせる事なく三人を地中の
底に引きずり込んでいった

彼等の最後に立っていた場所には、黄、緑、茶の魔石が静に輝いていた

「さて、邪魔ものは消えたし続きと行こうじやない？」

加弥はは笑いながら千角を構える。赤いオーラが吹き出る

「そうね。この方が早いわ」

深娜も断罪の鎌を下段に構え、呪文を唱え始める

「・・・・・負けないよ」

洸夜は目を閉じ天に祈りを捧げる。後ろには何か異様な歪みが見える

慎はあえて見ない振りをしていた。

一触即発の緊迫に水を射す者がいた

「これこれお嬢さん、どうしたのかね？探し人かな？」

そこに立つのは身長約120cm、サバドとかの紫の三角ずきんで顔を隠し、上は全裸でたるんだ腹、『男氣！』と刺繡された赤のふ

んどし（無駄に短い）をなびかせた年齢不詳の変態がいた
「わしの名は『超絶占いマスター425番目』の弟子、ふうう～アあ
え～ズつう～マえああ～4！2！5！』じゃ！」

『・・・・・』

「わしの名は『超絶占いマス・・・』」

身構える四人

「この世にいってはいけない生物ね」

加弥は拳を強く握る

「存在が猥褻ね」

深娜の手の紅い炎がどんどん大きくなつていく

「悪魔の化身よ」

さつきまで晴れていた空は真つ暗の雷雲が集まつてきている

「アリ！ そのものだ」

輝く拳は激しい雷に包まれる

「ま、待つのだ、わしの占いで君達の探しものも探し人も一発じや
ぞ！」

すぐさま円を組相談を始める四人

10分経過

チームの代理代表に就任した加弥は
「なら野崎霞の居場所を占つて」
「よからう。では早速始めるぞ！」
変態もとい超絶占いマ（以下、超マー）はブツブツと何かを唱え始

めた

小刻に揺れる体に合わせてたるんだ腹もプルンップルンと揺れる

「ちゅいぬがやあゝみゅひりぬむいたかにやら～」

段々動きが激しくなる。一段とたるんだ腹がブルンブルン

「ベントラー！ベントラー！」

さらに激しさを増す超マー

特に下半身！――！

「ふ、フフフフフフ――！」

超マーは方膝を付き、両手を天に掲げる

「پうゅラえあズゅマゅわ～～！――！」

無駄に雷が落ち、派手な演出を見せ付ける

「わかつぞ！」

『なら霞は！』

「」の世の句処かで生きておる――

形容しがたい殴打と断末魔の叫び

自主規制

しばらくお待ちください

「じょ、〔冗談じゅ。霞とやら今は南の森の中にしてゐよひじゅ〕」

崖に逆釣りにされた超マーは息絶え、四人ははるか南の森を田指し
旅だった

(北の鉱山から南の森まで約一ヶ月かかります)

「ねえ、たつた一週間で南の森に行けるの?」

加弥の当たり前の疑問に深娜が答える

「上位魔道師なら一点の位置を数分で移動出来るわ。一点に魔力の結晶を置いとけばそこを田印に高速移動が可能よ。この場合霞は拉致されたって事かしらね」

「敵に拉致されたのに生きてるって事は人質か?」

「慎君、ちょっと不謹慎だよ」

「わりいわりい」

などと愚痴を言つたりどつきあつたり喧嘩（主に三強）したりしながら森を田指す

【森森の森森森森な森森森な森森森の森】
と書かれた看板の先には森と言つより林なんじやないかみたいな森が広がつてゐる

辺りを警戒しながら、たまに大声をだして靈を呼びながら奥えと進む

『いない』

一週間程さまよつたが全く見付からない

すると一羽の鳩が飛んでくる

足に縛られた手紙と小包に気付いた加弥は早速手紙を読んでみた

「魔王第五写生部リーダー アネム二です。昨日おたふくなつてしまつて寝てます。魔石をどうぞ」

複雑な気持になつたそうだ（後日談）

「はー・・・・・・・・・・・・

溜め息を吐く深姫は夜の見張りをしている

五つの魔石を手に入れ、残りの期限が半年を切つた今現在、霞の消息は未だに掴めていない

「はー・・・・・・・・・・・・

霞がいないまま約二ヶ月半が過ぎたが、寂しいと感じた自分に驚いた。

周りの皆と違い、付き合いは一年ちょっとしかないが初めて直接友達と言つてくれた大事な友達だ

二年前に考えたこと

私は霞をどう思つてるか・・・・

「分かんないわよ

空には紅い満月が輝いていた

さらばに月日が流れ・・・・と言つか一週間過ぎて

手挂りなし

昼食を取りながら頭を抱える四人

「あの変態嘘いつたんじやないの？」

ようやくその辺に頭の回った加弥

「今度見付けたらこの世こら消すしかないわね」

憎惡の炎が燃え上がつて深姫

「ほんとほんといい加減な奴がいるな」

三角ずきんの赤ふんおやじ

「天罰与えるしないわ」

何やら天に祈りだした洗夜

「皆気付け」

一人冷静につっこむ慎

自主規制

しばらくお待ちください

「わしはあいつとは違うわい。人違いじや」

ボッコボコにされた超マーは半泣きで弁明

彼いわく、425のフンドシより自分のは長い

納得した四人は改めてボコる

しまくおめくへひまじ
こむくへすくだせー

「『超絶占いマスター』の弟子である我等の占いは外れん。恐らく
その一ヶ月で他に移動したんぢやない」
木に逆釣りに（ふんどしはじめくれないよつ拘束）された超マー15
は改めて占ってくれた

徐々に震えてくるたるんだ腹
さうに激しさを増す超マー、たるんだ腹はブルッンブルン

以下略

「こゝに西へ一月行つた荒れ地ある。わしごとこではひきへ金
えぬじやうつ

超マーを逆釣りのままで残し四人は急いで旅立つた

「ちよつ、ちよつと君ラ、降ろして！ああわもういなーーー！うなつ
たら秘伝の動きでブルップルんブルップルん！

どうなったかは知らない

荒れ地に着いた一行はまずは建物を探し始める

一時間後

妥協

「ないよー」

半泣き状態の加弥は地べたに座り腹いせに近くの石を投げ

「か～す～み～く～ん

洸夜は泣きながら杖を振る

「ぐひや～～

慎に全ての腹いせが集中する

深姫は先ほどから何やら遠くを見てる

「あれって家じゃない?」

米粒みたいなサイズの何かの上は三角形。
まるで屋根の様

四人は今までにない速度で走り、家の前に立っている。

見た目はかなりゴージャスで、玄関には可愛らしい人形が並んでいる
荒れ地には全く似合わないメルヘンなハウスだった

いざ乗り込もうとすると突然上から人が降りてきた

白の着物に身を包み、肩まで伸びた髪は後ろで束ね、顔は狐の面で
隠されている。

「何様だ」

冷たい声はやや高いアルトといった感じで女性の声だ

「実は人を探しているんですが」

リーダー代理の加弥は一步前に出て聞いてみた

「ここに誰か人が来ませんでしたか？」

「誰も来ていない」

即答だった

「本当に誰も来てい」

「来ていない」

即答だった

押し黙る四人

狐面の人はずつとこちらを見ている

「どしたの～」

氣の抜ける様な声の主は一階の窓から顔を出していた

「千鶴ノ様、この者達が人を探していると」

「なら上がつてもらつて～。疲れてるみたいだし」

「かしこまりました」

四人は狐面に促され部屋へと入った

やはり中身もゴージャスでメルヘンなハウスだ

「おまたせ～」

階段を降りてきたのはショートヘアに細い目。ほつそりとしていて出るところの出た体、ニコニコした顔で出迎えたのが千鶴ノ様だ

「こんなとこに懃々仲間を探しに来るなんて大変ね～」

しゃべり方といい笑い顔といい、猫みたいな人だ。四人全員がそう思つた

深姫は事情を説明する

「三ヶ月ほど前にはぐれたんですが」

「特徴は？」

「髪が伸びると女に見えて司書服の格好をした170前後の男です」

「…・・・・え？」

「ですから髪が伸びると女に見えて司書服姿の170前後の男です」

「…・・・・マジ？」

『マジー!』

ゆつくりと千鶴ノさんは狐面の方を向く

「仮面取ってくれる?」

「かしこまりました」

パツと面を外すとそこにはいたのは

『霞!』

「違います。私の名前はカスミです」

『霞だつて』

「違います。表記が」

「いやーね、たまたま空の旅してたら山と山の間の辺りで血だらけで倒れてるの見付けてさ、慌てて連れて帰ってきて治療したわけ。なんとか意識が戻ったんだけど記憶喪失みたいで。だから家に置い

深娜の質問

「」の格好は?」

いやね、あんまり女っぽく見えたもんつい

加弌質問

「ちよつとした遊び」・「・ろ
」の声は

慎質問

「ついでに貴方は何者？」

「魔道使いでナイスなオネーサン！」

洗夜質問

「霞君返して」

「じえ～～～～つたい嫌！」

討論開始

三日経過
続行中

一週間経過

続行中

さらば一週間

答えです

結果

「実力で奪いんじゃーい。行くのよカスミー!」

「かしこまりました」

「手加減しないからね」

指を鳴らす加弥

「手加減して勝てるんですか?」

「舐めんな霞、俺らはその道極めてんだ。半端には負けんぞ」「慎も戦闘モードである

すると千鶴ノさんから一言

「ここ二ヶ月私が稽古してたから。これでも私『砂地の魔女』って言われてるのよ~」

深娜は驚く

砂地の魔女とは魔術を学ぶ上で教科書に必ず載る最強の魔女なのだ

「因みにカスミったら殆んど初級しか使えないのに一つだけ私も使えない魔法覚えちゃつたから。私もビックリ。テヘッ」

「それでは参りますよ」

身構えるカスミ、三人も構える（洗夜は救護班に回ったので不参加）

「ちよ～つとまつた～！」

千鶴ノさんが急に待つたをかける

「カスミ、あのキメポーズよ！」

狐面の下から物凄く嫌だと「うオーラが出ていい

「千鶴ノ様、流石に人前は・・・」

「だまらつしゃ～い。乙女の貴方がこんの試練乗り越えれなくてどうすんのよ」

「千鶴ノ様、私は男です。服まで剥ぎとつて調べたじゃないですか

三強は今年一番の驚きをあげる

「いや～。霞が見ず知らずの女に～」

「いくら記憶喪失だからってあんまりだよ靈君～」

「・・・・・消えなさい」

まがまがとしたオーラを噴出している三人を横目に更に

「勝つたら膝枕してね～」

「千鶴ノ様、普通は逆です。後訂正していく下さい。服を剥ぎ取ったのは上だけです」

三強既に聞く耳持たず

「さあカスミ！ビシッと決めなさい！」

「どうしてもですか？」

「もつちろ～ん」

深い溜め息をついたカスミは觀念し、足を少し開き仮面を外す
女っぽく見えてしまうその姿と中々可愛らしい声で暴挙に走る

「魔女っ子さんの一の弟子、カスミン参上！悪い輩はカスミンが許しません！何処からでもかかつてりつしゃい」

三強 + 男は精神破壊攻撃に心を折られそうになるが必死に耐えた
それは頑張つて告白したら『生理的に嫌！』と言われた男子なみの
辛さだらつ

立ち直るのに一時間程かかつた彼等は改めて試合を始める

最初に仕掛けたのは慎だ。低い姿勢からカスミの溝へ拳を突き出す。
しかし霞は拳に手を添え軽く受けながら逆に力を逆手に取り投げ飛
ばす

宙を舞う慎は、なんとか体勢を立て直し着地しようとしたが慎の上
をカスミが飛び、首に足を絡め左右の手を掴み動きを封じる。
そのままの体勢で落下した慎は喉を強く打ち、その上エビ反り状態
で落下したので余りの苦しさに呼吸すら満足に出来ない状態だ

「一人目」

冷たく言い放つカスミンは加弥へと仕掛けた

懐から放つナイフを加弥は千角でうち払う。その隙に接近したカス
ミへ加弥は下段から上段へと回し蹴りを放つ。しかしカスミは手前
で止まり、リズムを崩すような不規則な攻撃を仕掛ける。

決して隙を見せぬコラコラと揺れながら加弥の連撃を避け、小さな

ミスを見逃さず徐々にダメージを蓄積させていく

「か、霞の馬鹿！」

地を蹴り一瞬で間合いを詰め渾身の一撃が霞の顎に触れた
勝利を確信した加弥に霞は冷たく言い放つ

「まだ早いようだ」

霞はその場で回り加弥の一撃を避ける。加弥は拳を突き出す力を停
める事が出来ずに自然と体は前へと向かう
その横で回避した霞は勢いを殺すことなく手刀を加弥の首筋に当てた

加弥は意識を失いその場に崩れ落ちた

「二人目」

仮面の下の表情を知る術のない今、深娜は恐怖しか感じなかつた

「貴方は魔術者か。接近戦で行くのは卑怯だな」

そう言つて距離を取り手の平を向け身構える

「彼方達の討論を聞いて分かつたことですが、記憶のあつた頃の私はチームの中では一番弱かつたみたいですが・・・」

「・・・・・・・・」

「負けていいんですか？」

その言葉に深娜は己を取り戻す

「ふんっ、初級呪文しか使えないのに私に勝てるの？」

「なら手合わせ願いますか？」

「死なない程度には抑えてあげるわ」

二人は同時に炎弾を放つ

相殺した炎は煙を放ち視界を奪う

しかし深姫にとつては相手の魔力を感じる事が出来るので何の問題もない

煙りなかに向かつて

「Mアイス！」

氷の刃を無数に叩き込む。しかし直撃出来なかつた事を知ると次なる呪文を唱えた

「ウインド！」

見えない衝撃波は一瞬で着弾し、一帯を吹き飛ばした

煙が薄れる、黙視が可能になる中、カスミは平然と立つていた
「凄い威力と早さですね。避けそびれました」

右肩に衝撃波を受け着物が破れている

「本気出して良いですか？」

「出さなきや死ぬわよ？」

「では！ウォータ！」

放たれた水は深姫へと向かう

「その程度で勝つ気？」

「そんな気は無いさ。ウインド！」

「複合呪文！ 考えたわね」

まるでシャボン玉の様になり深姫へと向かう

「でも只の水芸ね」

深姫はウインドを放ち次々とシャボン玉を割つていいく
しかしカスミの攻撃はまだ続いている

「君の周りは大分水気が多い様だね？サンダー！」

電導率の高くなつた周りには予想以上の威力の落雷が落ちる
とつさの判断でマジックバリアを張つたが防ぎきれずダメージを負つた

その隙を逃さずカスミは空高く液体の入つた瓶を投げナイフで瓶を割り、そこ目がけファイアを放つ

「あれはガソリンだ。そうだな・・・流炎つて名前はどうかな？」

降り注ぐ炎を必死に避ける深姫へ追い討ちをかけるように次々とア
イスを放ち続ける

「息が上がりますね？」

「だ、黙りなさい！」

「なら黙ります」

そう言い小さな袋を深姫の足元に投げつける
破れた袋から白い粉が宙を舞い辺り一帯の視界を再度奪う

「私に目隠しは意味ないわよ

返答は無く、静寂だけが続く。

「深姫ちゃん。お姉さんからの忠告よ～」
家の方から千鶴ノさんの声が聞こえる

「粉塵爆発って知ってる？」

氣付いた時には遅かつた

激しい爆発が広がり轟音が響く

「三人目か」

冷たい声は煙の中、静に響いた

「やつと田を醒ましたか」

ベットに横になっている深姫にカスミは話しかける

額の濡れタオルを交換し椅子に腰掛ける

「服は洗濯しました。後着替は御仲間の方にお願いしましたので心配しないで下さい」

「・・・・・」

押し黙る深姫をカスミは黙つて見ている

「・・・・・負けたわね」

「そうですね」

短い会話

久しぶりの会話だ

「皆は無事でしうね」

「彼方が一番重症です」

「やつたのは誰よ」

「私は最初に本気で行くと確認しましたから」

澄ました顔で狐面は話す

「つうかお前ら過信しすぎだ。いくら強いからって俺に負けるようじゃ不味いんじゃないか？」

「か、霞？」

突然の変わりように困惑する深姫

「慎は威力 자체問題ないが避けられた時の隙が大き過ぎるし、加弥は連撃に集中し過ぎで初速の勢いを巧く使えてない。お前は魔法に頼りすぎてスタミナの無さ、後化学的知識が足りない。単体で使いすぎだ」

声もいつも霞に戻つている

「洮夜は多分打たれ弱いのと魔力の安定性だな。全く少しほは克服つてモノを考える」

溜め息をついて立ち上がるカスミ

「ほれ、居間に行くぞ。みんな待つてる
ドアに向かうカスミ呼び止めるを

「靈、もしかして記憶が……」

振り向くカスミの顔には狐面がしてあり、可愛らしい声で

「たまにはサプライズが必要ですから」

そう言い残し部屋を出ていった

「カスミが勝つた。膝枕して~」

「千鶴ノ様、少しば貴重してください~」

「嫌だも~ん。とりや~」

カスミの膝の上で気持ち良さそうにピロピロする千鶴ノさん、それを非常に悔しそうに見る一人と羨ましそうに見るフチ

「これでカスミは私のモノよ~」

「千鶴ノ様、勝手な私物化は止めてください~」

「嫌つ、カスミは私のモノよ!」

カスミは千鶴ノさんのおでこをベシッと叩く
「か、カスミがぶつた。親父にもぶたれたことな……あ
つたわね確か」

溜め息をついて面は外すカスミ

「千鶴ノさん、ちょっといいですか?」

「あれ? カスミの声が戻ってる? ま~いいや~」

千鶴ノさんの頭を持ち上げソファーの上に乗せる。膝枕終了で千鶴ノさんはなんか泣き出しそうな顔になつてゐるが今は無視

痛い眼差しを送る四人の方を向いて怒鳴つた

「『』の馬鹿たれ！－－いくら相手が俺だからってあそこまで手を抜くやつがあるか！マジの戦闘なら確実に全滅だぞ！お前ら少しは自分の欠点治す努力をしろ！ただですら武闘派集団なんだから頭を少しほはえ！」

その場の全員は呆気にとられてる

「慎は着物の裾辺りばっか見てるし加弥は殴る時目を閉じてる。まともに戦つたのは深姫だけだぞ！少しほは見習え！それから」

霞は笑いながら

「ただいま皆」

頭の整理がつくのに30秒

「おかげり霞」

最初に言つたのは深姫だった

『霞が戻つた』

加弥と洸夜は霞に飛び付き慎は笑いながら肩を叩いた。千鶴ノさんも一步遅れて膝を死守するべく霞に飛びかかる

「霞が戻つてゐる！きっと私達の友情パワーよ！」

「そうだね加弥ちゃん、私達の友情パワーだね」

「いや、違つし。一ヶ月程前から治つていた」

『へ？』

霞曰く

千鶴ノさんに稽古をつけてもらつていて空高く投げ飛ばされて頭から落ちたときに覚醒したそうだ。しかしこのまま行けば皆と全力で戦えると思い今まで黙つてたそつだ

その結果

「お前らが見事に手抜きをしたせいで怒りの矛先が深娜に行つちまつたんだよ。すまんなー深娜。お詫びに何かあつたら聞いてやるぞ」霞の提案に数十秒考え、霞に耳打ちをする

「そんなんでも良いのか？まあ俺は構わんが」「

「なんて言つたの深娜ちゃん！白状しなさいー。」

「深娜さん！抜け駆けなんて卑怯だよ！」

「霞！俺はお前を信じてたのに！」

「かすみ～。お腹すいた～。『ごはん～』

霞は改めて皆ワガママだと確信した

その夜特製カレーを堪能した皆は直ぐ様熟睡した。慎はソファーの下でコの字で寝て、加弥と洗夜と千鶴ノは見事に霞に引っ付いて寝ている

「・・・・・暑苦しい・・・」

引っ付いた三人を引き矧がしソファーに置いていく

外に出た霞を迎えたのは三日月の光と深娜だ

「散歩とはまだどうしたんもんですか？」

「聞きたい事があるのよ。砂地の魔女が言つてた自分も使えない魔法の事」

只今黒のローブは洗濯中なので千鶴ノさんの白のワンピースを着て小さな岩に腰掛けている。深娜は手に魔力を込め

「見せてくれないかしら？」

霞は乾いた笑みをし

「脅しは止めてくれ。なんか目に見える魔力の塊だぞ」

「なら見せて」

「テコでも譲る気は無いようだ

溜め息をつき何もない方を向く

「我は万物の父を知る者なり。我は戦の神、知恵の神を知る者なり。父なる姿は怒りなり。父なる姿は荒々しさなり。父なる姿は狂暴さなり」

霞は手を突きだし叫ぶ

「父なる名はオーディン！貫きし魔槍、小人鍛えし槍の名はグングニル！」

光の魔槍は大地を削り彼方えと消え去る

大地に爪痕を残し

「今のは・・・・・」

「千鶴ノさんも知らない魔法だ。俺の知る本の内容を力にする魔法」

深娜は震えていた。今の威力ははつきり言つて桁が違う。
もしあの時使われていたら

「安心しろ。俺が敵と認識しない限り攻撃できないからな」

「でも卑怯技よね」

「まーな」

霞は深娜の隣に腰掛ける

「会えなくて寂しかったか？」

「馬鹿じやない？イライラしてたわよ」

「それは残念。折角何かしてあげようかと思つていたが。なら加弥

「洗夜だけでいいか」

霞は側頭部を殴られる

「深娜さん・・・・・今殺そととしたよね?」

「別に。それはそうと私は不公平が嫌いなの。」

「つまり何か聞けと?」

頷く深娜は空を見て考える

「夜更かしに付き合つて」

「夜更かしね」、了解了解

二人は黙つて空を見ていた

空には相変わらず二日月が光つてゐる

「改めてただいま、我が友」

「改めておかえり。最初の友」

静かな時間が過ぎていった

「か～す～み～！！」

加弥の怒号で目を覚ます

「どうした加弥、朝っぱらからつるさこな

「黙らつしゃい！何膝枕なんて羨ましいことしてんのよ…」

霞の膝の上では深姫が静かな寝息をたてている

しかし明日は加弥ねと言つたらあつさり許してくれた。

分からんものだ

「え～～行くの～～～～～～～！」

「後数ヶ月で期限なんですから仕方ないですよ」

千鶴ノさんは霞を放しません

「今日は晶さんと会う約束でしょ。破つたら晶さん自殺しますよ
「まつさか～晶ならだいじょうう・・・・・・ぶじやないや。前好き
か嫌いか聞かれて面白半分で嫌いって言つたら首吊つてたからな～
「だから諦めて下さい。一段落したら来ますから

「ほんと！」

「女性に嘘は吐きません」

「やつた～。なら次会う約束！」

千鶴ノの唇が霞の頬に触れる

「へへへえ～～じや～ね～」

そつ言い残し千鶴ノは家に戻つた

頬をかく霞は振り向む

「じゃ、行こうか」

場の空気を読めない彼はとても不幸なんでしょうね

「霞…………今のは……何?」

「酷いよ…………霞君」

「…………魔女め…………消すしかないわね」

三人は一致団結して先ずは手始めに霞を包囲する

霞はようやく己の身が危ないと知り叫ぶ

「彼、罪人にして出来損ないの羽を持ち自らの足を失いし愚者、その名はイカロス！」

一斉に飛びかかる三強はその場で身動き出来なくなり宙に浮いている
「下ろせ霞～～せめてあの女だけでも!」

「下ろさないと天罰ですよ～」

「二人とも落ち着け～。落ち着いたら下ろすから」
途端静かになる二人は直ぐ様下りれた。

しかし深娜は一向に殺氣を放つのを止めていない

「お～い深娜」

しかし深娜は一点をじっと見ている
皆も釣られて見ると

ズビシッ！

見事な作戦勝ちで深娜は霞の頭を力一杯に殴った。その場に倒れる
霞を加弥と洗夜が包囲、更に地上に降りた深娜が加わり

たこ殴りである

「…………」何処？「

ふりだしに戻るとほーのーことだ

さて、只今の位置は魔王宅の前
暗闇にそびえるボロボロの城だと思っていたが小高い丘にある小さ
くも綺麗な城だ

「んで、後一つの魔石は？」

「安心しろ慎。ここにある」

門の前には小さな子供、まるでカボチャの頭をしたハロウィイの様だ
「お前から魔石の匂いする。五個あるな。ならこれで六個だ」

ハロ윈ン少年はオレンジ色の魔石を渡す

「いいのか貰つて？」

「六個ないと門開かない」

ハロウイン少年はケラケラ笑いながら門を叩く
「入れ勇者。隊長待ってる」

ゆっくり開く門をぐぐり足を踏み入れる魔王の城

「スッゲー綺麗ー」

隅々まで掃除が行き渡り、チリ一つ見当たらぬ

「キャッホ～生メイド～！」

飛びかかる慎を袋叩きにして柱に縛りつけておく。メイドさん一行に深く御詫びをしてから聞いてみた

「あのー、隊長さんはどちらに?」

メイド一同は後ろの柱を指差す

「読んだかね?」

そこから現れたのは長身にオールバック、スラリとした体つきになりの美形。そしてどことなく傲慢

「私がこの城の隊長を勤めている月野屋政樹だ。つきのやまさき 様をつけたら賞品としてクッキー一枚だ」

「貴様、なに馬鹿を言つている?」

奥の階段から降りてきたのは長身に黒のショートヘア、意思の強い表情でから美人だ

「紹介しよう。副隊長みきはしらね 三木原麗奈君びぐるおはな びぐるおはな」

脇腹を蹴られて壁に突っ込む政樹、痙攣している

「貴様が相手か?」

懐から抜いた一本の槍、三矛の槍は銀色に輝き、一部の隙も見当たらない構えだ

「待ちたまえ三木原君、勝負の内容は私に決定権があるのだ。矛をしまいたまえ」

いつのまにか復活した政樹は笑いながらクッキーを一枚三木原の口に入れる

「おいしいかね?」

再度政樹は吹き飛んだ

「それではこれより料理対決を始める。お題はデザート！始め！」
政樹の合図と共に三木原、霞は同時に動いた。それぞれ必要な材料を手に取り調理にかかる
三木原の包丁捌きはかなりの腕前で見る見る果物は鮮やかに盛られていく

「中々やるな」

「勝ちは譲れないわよ」

お互い死力を尽す戦いだった

三十分経過

「これより試食を始める。私は公平に判断する。三木原君は実は誰もいないとテレテレになるとか良くお菓子を作ってくれるとか実は結構乙女チックとか抜きで判断するとも」

しばらくお待ち下さい

「では・・・始めよ！」

ボロボロになつた政樹は始めて三木原の作品、『イチゴと桜桃のタルト』を食べた

薄く焼かれた生地の上にふんだんに盛られたイチゴと桜桃（さくらんぼとも言つ）、鮮度を示す様に艶のある果実、派手に飾らずカスタードクリームのみ。

果実の甘味だけでここまで仕上げた最上の一品である

「また腕を上げたじやないか。余りの甘さに私は倒れたいがいいかい？」

「まだ試合は終つていない。ここつのがまだだ
霞は政樹の前に料理をだす

「これはなんだい？」

「柚餅子だ」

柚餅子とはコズの頭部を水平な切り、中身を取り出した中にもち米や刻んだクルミ、カヤの実をみそ、醤油で調味して詰め、蒸してから干し、薄切りにして酒のさかなにする食べ物だ（干しは深姫の呪文に任せせる）

一口食べた政樹は黙る

「酒を持つてこいー！」

高らかに叫ぶ政樹、メイドは急いでお酒をつぐ

「くそ、手が止まらん」

四つほどあつた柚餅子はなくなり、政樹はまだ沿まつていない

「もうないのかね？早く作ってくれないか？」

「なら聞くが勝者は？」

「決まっている。君の柚餅子は反則級の甘さだ。よつて反則負け！」

勝者二木原！」

じぱりくお待ち下せー

「私の敗けだ。これは甘い。後で教えてくれ。それでは」

血祭りになつた政樹を厨房に残し、我々は魔王の間へ向かつた

大きな扉の前で息を飲む五人、本物の魔王が向こうにいる

意を決し、扉を叩く

「はーい、どちら様ですか？」

?、魔王様？

「あの~、魔石を持って来たんですが・・・」

「はいはい今行きます」

開け放たれた扉の前に立つているのは白髪頭で長い白鬚のおじいさん

ん

「いやー有難う、わざわざ付き合つてもらつて、さあ、上がって上
がつて」

魔王（老人）に促され魔王の間にに入る五人

広々とした部屋を埋め尽す本の山

霞の目はせわしなく動き、珍しい本を見付ける度に読みたいという

オーラを発している

「少年、読みたいなら読んでも構わんぞ」

「本当にですか！」

直ぐ様本の山に向かい読みだす本の虫、残された四人は魔王と話している

「いやー一応わしも魔王なんだがこの姿で魔王としての威儀という
かその辺りが薄くなつてな。上の連中にも睨まれておつて形だけの
戦をしなくてはならなくてな。こんなことをしつたんじや」

老人は笑いながら紅茶をする

「まさかこんな若者が来るとわな。世の中中々楽しめるの〜」

愉快に笑う老人（魔王）を見て四人は思つた
世界はいい加減だと

その夜は魔王宅に泊めてもらい次の日の昼辺り城まで送つてもらつた。魔王もまた来るよう誘われ了承する五人

国王に無事を告げ早速願い事を叶えてもらつた

とある小高い丘の上に一軒家がある。シンプルな作りで何処かの別荘の様にも見える

そんな家の中では

「私が一階の部屋！」

「加弥ちゃんズルイよ。私が最初に言つたじやん！」

「公平にジャンケンで勝つんだから私よ」

「嘘だ深姫ちゃん、魔法でズルした癖に！」

「まあまあ落ち着いて。そんなに一階が良いなら俺一階に行くから

『霞は一階！』

そんな猛攻が繰り広げるなか慎は外にいた

首は鎖で繋がれ小さな犬小屋みたいなのがある

看板には『獣』と書かれている

「耐えよつじやないかこの苦行！きたれ獣の力！我に力を！……！」

彼等の旅はまだ続きそうだ

他人の事を考える。これ当たり前（後書き）

この作品は暇神さまのネタにより作成されました、有難うござります

はい、すいません。更新がかなり遅れましたウドの大木です。その
分ページも最長記録達成です。

いや～頑張りました。寝不足です。でも書けてうれしいです。
ではまたいつか。

ネタの応募です。小さなネタでもいいのでドンドン下を）。待つて
ます！

フエチ伝（前書き）

それは突然だつた
男は立ち上がり雄叫びを上げ走り出す
目指せ、乙女の衣を！
掴め、己の欲望を

御劔様提供斬新な心に残るストーリーを貴方に

フエチ伝

そこは闇の訪れたとある美術館

闇夜に射す月の光のみが輪郭を象り、静寂が支配する唯一の時間でもあり、その時を走る者の時間でもあった

石を蹴る小さな音は闇夜に波紋を広げ、満月を背に黒い影が田を舞つていく

音もなく影は空えと飛び、黒のマントを翻し、黒の輪郭を渡つて行く

邪魔するものは心地よい風に運ばれる人工の香り

人の手により作られる悪臭も、今は心地よい

それはまるで宝を手にする為の障害の様に、この香りを越えたとき

彼は宝を手にする

「昨夜ミニネット国立美術館からエリザベス一世の愛用の帽子が盗まれるという事件が発生しました。警報が発生してから約5分と短い時間で手際よく逃走した犯人はプロの犯行と思われます。目撃者の証言では身長は160前後、マントを着ており大声で『世界の匂いが俺を待っている!』と支離滅裂な事を叫んでいたそうです。警察はプロの犯行と見て慎重に捜査をすると共に、精神病院のリストを調べ直している模様です。最新の情報が入り次第御伝えします。次のニュースです。先日アスパレ内閣代表が国会中に自分はロリコ」

「全く世の中事件で一杯だな」
ソファーに座る俺は、入れたてのコーヒーを飲みながらテレビから田
を離す
「で、君達、少しは離れる。飲みにくい」
「深姫ちゃんとコウちゃんが離れたらいいよ」
「加弥ちゃんと大川さんが離れたらね」
「二人が離れたらいいわよ」
右に洮夜、左に深姫、前に加弥（脚と脚の間に挟まる感じ）
「なら俺が移動する。三人仲良くてテレビを見ていたらどうだ」
コーヒー片手に立ち上がり外に出る
我先にと付いてくる三人より先に戸を開めゆっくり飲む

「にしても美術館の犯人マニアックだな。まるで慎みた……」
慎の部屋（犬小屋の特大）に慎の気配が無い
そして何やら置き手紙

世界の匂いが俺を待つていてる！だから俺は旅にいく…………

神よ、あの馬鹿に天罰を

そして一ヶ所！が違うからな

「現れたぞー！」

「盗難犯だ！」

ライトに映る黒い影は両腕をコウモリの様に広げ

「夜の怪人ゾマー参上！エリザベス一世の愛用カー・ディガング頂ぐぞ
！とあ～」

弧を描くように回転しながら5階の高台からスタッフと着地してキメ
ボーズ

片足立ちでバサッと拡げられたマントをなびかせ白鳥の様に優雅に決まる

「匂いが好きな子だ～れだ！」

一斉射撃される銃弾を主に腰の辺りをクネクネしながら避け、次々と警察を蹴散らして行く

「スコチバーン尹！」

「カエニシ
シカ」

卷之三

「フエチチヨーブ！」

「ああっ

静かになつた美術館の入り口を堂々と抜け、お目当てのカーディガンを手にした

「おおー！」の優雅にして纖細な匂い。汚れた心を浄化してくれるよ
うだ・・・」

しばし匂いを堪能した後ゾマーと名乗る怪人は高笑いと共に走り去つて行つた

「...」。少しうまく言葉を詰め込もうとしたが、結局は言葉を詰め込めた。

怪人は闇夜を走り去った

エリックルア 国立博物館、そこに宛てられた一通の予告状
【今夜11時20分、クレオパトラの体操着を頂きに行く。怪人ゾ
マー！】

報道人と野次馬根性丸出しの市民に囲まれたエリックルア 国立博物館、警察も数々の汚名返上と特別部隊を編成し厳重な警備をしいでいる。蟻一匹入れないとはこのことだ

「隊長！蟻が一匹、蚊が七匹侵入しました！」
「アース・ジ ット噴射！」

昆虫は入れました

さて、予告時間も残りわずかの時、市民の一人が空を指差し叫んだ
「空だー空に変態がいるぞーー！」

月を背に颯爽と苗を舞い

月夜に映された白く鍛えられた肌

紙袋に開けられた二つの穴から覗く純粋な瞳

装備は黒く張り付くピチピチのゴムパンツ

そこから伸びる黒き巨塔

8階程の高さから素足で着地したモノノフは背筋を反らし巨塔を強調させながら叫んだ

「ゾマーよ、私と勝負だ！」
ソプラノボイスが闇夜に広がった

その場にいた全ての生命が唖然としていた

田の前の変態は何がしたいんだ

その時全ての疑問を打ち消す声が響く

「よからう。このゾマーが相手だ！」

それは空の上からではなく、さつきついたタクシーの中からした

「すまん、渋滞に巻き込まれて遅くなつた」

ゾマーは素直に頭を下げ、市民の間を優雅に歩いてくる

「貴様、名はなんだ

「私の名は山田照之、貴様と勝負がしたい」

警察が急いでメモをするなかゾマーは忍笑いが響く

「俺に勝てるかな？」

「ならば試すまでー」

山田は素足で地を蹴り両手を頭の後ろで組んで腰を素早く捻る
巨塔は鞭の様にゾマーに襲いかかるが上半身の小さな動きだけで連
撃を避けていく

上下左右に激しく動く山田の腰、それに伴つ
「はあっ、つづ・・・んあつーはつー」

山田の奇声

しかしへゾマーには当たらず虚しく空を切っていた

「どうした山田！貴様の実力はこの程度か！」

「くつ、くそ～～！！！」

山田はとうとう禁危の技、腰を前後に動かし巨塔も止まらぬ早さの突きをくりだした

「おわりだ～！」

しかしへゾマーは笑っていた

「これを見ていたのだ！」

突き出された黒き巨塔を避けると同時に掴み更に引っ張る！

「はあっ、な、何を！」

ゾマーは引き千切れんばかりに伸びた巨塔がけ手刀を振り下ろす

「斬拳！」

引き千切れた巨塔は弧を描き市民の方に飛んでいく

市民が混乱してゐる中、悔し涙を流す山田をゾマーは見下ろしていた

「山田、何故負けたか分かるか？」

「・・・私は未々未熟だった」

「ふん、分かつてない様だ。それでは生涯勝つことは不可能だ！」ゾマーは声を張り上げる

「己の素顔すら見せれぬ臆病者の変態に、俺が負ける訳がない！」

山田は顔を上げる

流れる涙は紙袋を濡らし今にも破けそうだ

「お前が素顔を見せれる様になつた時、また勝負をしてやる」

ゾマーは博物館の方を向いて走り出した

「さりばた！山田！」

嵐の様な決戦と市民の混乱により、ゾマーはクレオパトラの体操着を難無く盗んだそうだ

今日は椅子に俺が座りソファーに三人座っている

いや～飲みやすいな～お茶が

とてつもなく不服そうな顔でお茶を飲んでいる加弥は

「霞、何この洗面器？」

「まあ時期にかかる」

そつ言つていると一度良くてテレビでコースが流れた

【速報です。昨夜エリックルア国立博物館に怪人ゾマーが現れ、山田照之（31歳無職）と交戦。市民を混乱させその隙にクレオパトラの体操着を盗み去りました。今回の事件により警察の信頼も崩れ、今後は国防が動くとの噂が流れております。今回、偶然にも連続盗撮犯のリチャード・ゲイも現場で発見され現行犯逮捕、押収されたカメラから複数の男の写真が写っており、その中に怪人ゾマーが収められていました。『写真が映る』（ブハーツ）この顔に見覚えのある方は最寄りの警察にご連絡下さい。次のニュースです。タスカラ国のメイド喫茶に強盗が押し入り、自分専属のメイドを要望、現在も】

「ほら、洗面器役にたつた」

むせかえる三人は何とか落ち着き考えた

「通報する？」

「でも加弥ちゃん、そしたら私達の仲間つてバレるんじゃない？」

「その時はシラを切るしかないんじゃない」

三強の相談を聞きながら思つた

こいつら既に慎を切り捨てる気だ

まあ警察に捕まるほど弱くはないから心配ないか

そう思い直しお茶を飲む俺に深姫は

「そう言えば霞、部屋のテレビの調子が悪いから見てくれない？」

「テレビ？まあ別に構わんが。どれ」

工具片手に深姫の部屋へ向かう

気付かなかつたが後ろでかなり睨む一人だった

「霞、次は私の部屋ね～、色々あるから」

加弥は早速攻撃を仕掛け

「あら加弥さん。あなたの部屋の物つて壊れたのなかつたんじや無いかしら？」

「き、今日の朝壊れたんだもん！」

「か、霞君、出来れば私の部屋も。少し前にテレビの調子が悪いの」

少し遅れて追撃に走る

「洗夜、夜にちょくちょく俺の部屋來てるんだから早めに言つてく
れよ」

ちなみに部屋割りは洗夜が一階をゲットした

「ちよ、ちよくちよく來てるですってー！」

深姫はびっくりして俺の首を絞めています

「コウちゃん、ゆっくり確り隅々まで丁寧に余す所なく全て話し合
いましょう」

満面の笑顔の加弥は半泣き洗夜を引きずり自室へ向かつ

はて、俺は何か不味いことを言つただろつか？

薄れ行く意識の中自分に聞いていた

その晩ゾマー（今後は慎）は驚きの声を上げていた

「ない！ないない！モンローのドレスがない！」

展示会の守兵を片つ端から悶絶させた慎はかなり焦っていた
「むううきいいえええ～～～！」

大気を震わす雄叫びは周りのガラスを全てが割れた
そしてその時の一瞬の気配を感じそこに向かい新たな雄叫びを発した
衝撃波に似た雄叫びは柱をえぐり盛大な爆破を起こす

「その動きは只者ではない、何奴だ！」

薄れる粉塵から姿を表したのは170前後でスラリとした体格、顔
にはオペラ座の怪人マスクを装着し、その手にはモンロードレスが
収まっている

「これは私が頂くぞ。ゾマーよ」

「何をふざけたことを！どうせ彼女にでも着せて映画のワンシーン
再現する気だろうが！スカートぶわあ～って」

「そう言つお前もモンロー・ウォークでビビッピドゥーだらうが！」

双方アホなのが良く分かる

「まあいい。いずれ貴様とは決着をつける必要があるのでだからな
「望むところだ。お前が次に狙うのは俺と同じだろつ」

彼等がそのプライドを賭けて闘つう場所

アルマーダ資料館、文化財コーナーの一角を占めるアンネ資料所

狙う獲物は只一つ

さて、所変わつて旅する魔王邸
霞は朝早くに出掛けの準備をしている
朝五時なのでまず見付かりはしない
これ以上あの馬鹿をほつておく分けにもいかないので渋々ながら止
めに行くのだ
昨晩、犯行現場と慎の思考から次の場所は見当をつけたので後は
行くだけだ
靴を履き、いや出発……と行きたかつたが俺はピタリと止まる

首筋にはヒンヤリとした漆黒の鎌

断罪の鎌の持ち主、深姫が後ろに立つていた
「こんな朝早くお散歩かしら？」

「はい。制裁と書いて散歩つて無理に読む感じで
ゆっくりと手を上げ刃を指で摘み細心の注意を払い押す

「楽しそうね。ついていいかしら?」「

クイッと引っ張った鎌は首筋にはまたもやピタリ

「深姫さん深姫さん!刃が食い込んでますよー来てもいいから離して!」

必死の説得のお陰で一命をとつとめた俺と深姫は足早にアルマーダへと向かった

「霞ー!深姫ちゃんーどこ行つた!」

玄関を蹴破り飛び出した加弥はピンクと白の花柄パジャマの姿で周囲を睨み回し高らかに吠えた

「霞ー!帰つた日が命日よー!」

その時霞が震えたかどうかは定かではない

アルマーダ資料館前、応接ホール

闇夜に包まれたその空間には天井のガラス越しに月の光が降り注いでいる

そこに立つのは一人の若者

160の身長に黒のマント、碧と蒼の鎧に身を包み、短い髪に陥しい表情、その視線は向かいの男に注がれている

その男は170前後で黒のスーツを身に纏つたスラリとした体格、長めの髪を後ろで束ね白のマスクを装着し、慎の視線を直視している

張り詰めた空気が辺りに広がり重苦しい空間を造り上げる

「逃げなかつたか」

最初に口を開いたのは慎だつた

「誉めてやるぞ。仮にも旅する魔王の一員から逃げなかつたんだからな」

その言葉に男は少し驚いていた

「お前、旅する魔王の者なのかー噂と少し違つた」

「噂?」

男は語り出した

旅する魔王に逆らうべからず
旅する魔王に従うべからず

朱の衣の鬼神曰く

その剣何人も寄せぬ神速の域、その顔薔薇の如く即死の棘を持つ鬼
神なり

碧の衣の異人曰く

その拳何人も碎く破碎の域、その心何人も寄せ付けぬ結界を持つ異
人なり

白の衣の聖者曰く

その祈り何人も防げぬ天災の域、その姿天使の如く断罪を行う聖職
者なり

黒の衣の悪魔曰く

その言葉何人も呑み込む闇の域、その力全てに死をもたらす死神の
姿なり

人の衣の魔王曰く

その思考一国を潰す悪魔の囁き
その言葉一国を搖るがす地獄の叫び

その心全てに等しき無慈悲の喰き
その姿表裏一体にして無情の嘆き

故に総てを束ねし魔王に逆らつべからず
故に魔王の仲間に逆らつべからず

「お前つて異人つてより変人だよな」

「黙らっしゃい！貴様に言われたくないわい
あえてそつくりそのまま返してやりたい

身構える一人の闘氣は渦を巻き、辺りの物を吹き飛ばしていく

低く身構える慎に対し、マスクマンは体の力を抜き軽く構える

「先に聞く。名前はなんだ」

「小椋柘おぐらたか、あんたを倒す名だ！」

小さな音と足下に粉塵を残しその場から消える

「瞬歩か・・・クロケツト並だな」

壁、柱、天井。あらゆる場所に着音を残す

残像すら残さぬ速さだが、慎からすれば既に経験済み
横を素早く抜ける柘はナイフを抜き、無防備な腕へと向かう

「もらつた！」

だが慎は笑っていた

柘は急に視界が暗くなつた事に驚いた
それと同時に腹部に痛みが走る

掴まれた腕を捻り、膝を沈める

「わりいな。加弥の激怒ビンタの方が百倍早いんだよ」

力任せに柱に投げつけ、飛び蹴りを叩き込む。柱を突き抜け隣の展示室にまで向かう

「来いよ！まだ来れんだろ！」

瓦礫から飛び出した柘はマスクも取れ、腹部を押さえながら笑う

「あんたはやっぱ強いな。流石魔王の一員だよ」

その顔は笑いながらも苦しさを隠している

「でもこちとらプライド賭けてんだ。負けれねえんだよ」

ポケットから取り出したのは紫色の小さな水晶

「魔力の結晶。一つの呪文を込める事ができる代物」

柘は結晶を空に投げる

「勿論召喚獣もな！」

漆黒に広がる空間から突き出た赤褐色の無骨な腕、脈打つ手は獲物を探し空を掴む

さらに突き出した脚は廊下を削り爪は深々と突き刺さる

「ねえ、何こやつ？」

「幻獣だかなんかだ。詳しくは忘れたが強いことは確だ」

鋭い牙から滴る唾液は糸を引き、強靭な顎は音を鳴らしながら引き締まって行く

金色の眼は獲物を探し周囲を見渡す。その眼には殺意のみが染み込んでいた

それは獣と言つには優しく、竜とは言えない存在だった

身の丈は凡そ9m

低い唸り声は大気を震わせガラスは全てが粉となる

「俺つて獣より人が専門なんだがよ」

放つ闘氣に気付いた幻獣は殺意に満ちた眼を慎に向ける

「ぶつちやけ死ねやこらー！」

地を蹴り左膝に拳を放ち勢いのまま腹に回し蹴りを叩き込む

幻獣は痛みの原因でもある小さな存在が鬱陶しく感じたのか、鋭い爪で目の前の物を切り裂いた

吹き飛ぶ廊下には爪痕すら残らずクレーターの様になっていた

「いやいや、一撃死だろあの威力」

寸前で避けた慎は振り抜かれた腕の肘に拳を突きだし、そのまま股に踵落としをする

幻獣はその小さな存在が余りにも自分にとつて有害であると認識した手加減をすることを止めたのだ

幻獣の拳は瞬時に壁を破壊した。崩れる壁の雨を避ける慎に追い撃ちをかけるように太い脚は瓦礫の山を吹き飛ばす

その風圧に飛ばされる慎は壁に足を着きなんとか耐えた

「嘘だろ！」

その場を直ぐ様飛び退くと今までいた場所には深々と牙が突き刺さり、いとも容易く碎く

あの団体で速すぎる動き、そしてほぼ一撃必殺の威力

「反則級だろこのバカタレ！」

天井へと飛び急降下で頭を殴り、後ろに蹴り飛ばす

幻獣はこの小さな存在が今まで潰してきたどの敵よりも強いと知った

「潰すぜ獣野郎が！」

強く踏み込んだ体は一瞬で獣の足元に向かう

「砲撃槌！」

人の脛に当たる部分が見事に陥没し、前のめりに倒れる獣の顔の位置へと戻る

「取り合えず一辺死んどけや」

迫る獣の顔に拳がメリ込む

「零式重鎧撃！」

その瞬間空間全体が弾ける様な音が響き獣は一瞬にして数十メートル吹き飛んだ

建物はほぼ倒壊し、立っているのは躰割れた柱と慎だけだった

「疲れたー」

その場に座る慎は深く溜め息をついて改めて周囲を見渡す

「ブルマーが！俺のブルマーが！」

空の上からヒラヒラと落ちてくる物

それは男の憧れ
それは男の境地
それは男の口マン

しかし彼に触れたのは憧れの的でもなく、芳しい匂いでもない

「捕まえたぞ慎」

死神の鎌そのものだった

【緊急速報です。アルマーダ資料館が一夜にして廃墟となりました。原因はなんとゾマーと名乗る男、旅する魔王の一昧、慎の犯行と判明しました。現場には一枚の置き手紙が残っていたそうで、旅する魔王首領、霞の物と思われます。手紙の内容は『この度一員である慎が多大なる御迷惑を御掛けました事を深く御詫び申し上げます。アルマーダ資料館の修復、及び貴重な資料等の損害賠償は全額の六割を負担します。残り四割は慎と交戦した少年に負担をしてもらつてください。彼の召喚獣を殲滅しなければ更なる被害を被つていた恐れがあるのでその点に関しましては寛大な心で受けとめて頂けることを願つております。その他盗まれた品物は明日までに全て御返し致します。改め深く御詫び申し上げます』。この内容から、旅する魔王の認識を改めるべきではないかとの声も上がっています。また新たな情報が入り次第お伝えします。それでは次のニュースです。実は私もロリコ】

「ふー。何とかなったか」

ソファーに崩れるように座る俺はテレビを切る

今回は「タタタ」として非常に後処理に疲れた。こんな事は流石に一度切りにして欲しいものだ

「かすみー。やっと帰ってきたんだー」

加弥は笑いながら近付いてくる

手には千角が確りと握られている

旅する魔王の首領は今日も悲鳴をあげたのだった

一方慎はダイヤ鉱山を一心不乱に殴りつけていく

「かゝや嬢のたゞめならえやこらせつー

馬鹿は死んでも治らないものだ

フエチ伝（後書き）

ようやく四作目を提供出来ました。

疲れています

でも嬉しいからやつてます。

さて、次のネタを決めるのは貴方かもしれない！バンバンネタ提供
待っています！

しつこい人程意外に根はいい人かも？（前書き）

はい。かなりお久ですウドの大木です
ここ一ヶ月朝六時出勤という地獄を味わつて執筆が遅れてしまいま
したすいません。

今回のネタ提供は暇神様のネタです。
それではどうぞ

しつこい人程意外に根はいい人かも？

求めよ力を

奪えよ力を

全てを薙払う力を手に入れよ

なれば我は貴様に力を貸そう

温かい気候になりそろそろ夏服でも出そつかと考えてる靈は月一の

買い物に来ている

我が家家の炊事は全て担当しているので必然的に買い物に行くこととなる

と言つても流石に月一分の買い物は大量なのでお手伝いに一人同行してもらう

そして隣にいるのは前回犯罪に心染めたミスター・フューチこと慎であるジヤンケンに勝利した慎はお手伝いに料として【月刊、世界の著名人（衣類編）】を買つてもらつて、「機嫌

両手背中に山のような荷物を携え、氣味悪いくらい笑顔な慎は歩く
公共猥褻物で先程警察に補導されかけた

「いや～平和だな」

「そうだな。お前がもつとママドモだったりもつと平和だったよ。俺の人生も」

「はつはつは、ザレゴトは死んでから言え」

「はつはつは、なら貴様のその本と共に連れてつてやるうか焼却炉に」

「ごめんなさいごめんなさいもつしません」

なんとも和やかであった

とそね時一人の表情が険しくなる

「なあ霞、加弥つて来てたつけ?」

「いや、深娜も洗夜もお留守番だ」

「ならこの威圧はなんだろうね」

「新手でしょ」

100m程後方で大爆発が起きる

煉瓦造りの家を軽々と壊し周囲の物をゴミの様に吹き飛ばす

そこに立つのは獸の様な形をした黒の厚手の鎧に身を包み、長身で引き締まつた腕と2mを軽く超す大剣、短い金髪を黒のバンダナでしばり、何かに飢えた血の様な鋭い眼光は獲物を捜し辺りを見回し続ける

「どうする霞」

「関わりたくないから逃げる」

そのまま歩き去ろうとしたが男の眼は逃さなかつた

「貴様、魔王と呼ばれる人間だな」

地を爆発させ一瞬で距離を縮め数歩手前まで詰める

「もう一度問う。貴様は魔王と呼ばれた者か?」

低く威圧のある声になかば嫌気を指しながら答える

「そうだが何か用か?」

「俺と闘え」

『はつ?』

「闘えと言つてる。そうするは俺はまた強くなる」

「こりやまた唐突だな霞」

「ああそうだな。だがそんな暇はない。早く帰つてホットケーキを作つてやらなければいけないのでな」

「貴様の事情など知つたことではない。闘え」

赤黒い大剣を構え男は笑う

「来いよ魔王！」

大地の破碎と共に横薙に一閃斬りかかる

後方に避ける一人は荷物を抱えたまま一目散に逃げる

「速いな彼奴の動き、相当修行したんじゃねーか」

「ああ、多分漆黒の狂騎士つて奴だな。それより今は逃げるついでに彼奴を街から離す。これ以上評判落ちたら買い物に困るからな」

振り向き様にアイスを一発狂騎士の手前に打ち込む

しかし氷の柱はすぐに砕け散り直ぐに追つてくる

「逃げるか！仮にも魔王と呼ばれた貴様が！」

魔力の込められた刃は真空の刃となり一人に襲いかかる

「知るか戦闘狂！」

素早く宙に避けた慎

だが運悪く落ちる【月刊世界の著名人（衣類編）】

ズタズタに引き裂かれた月刊世界の著（以下略）を凝視しながら慎は叫んだ

「うああああああああああああ！」

碎ける窓に崩れる煉瓦、亀裂の走る路面！

それだけ慎には嬉しく貴重だったのだろう

その衝撃波により逃げのびたのは幸か不幸か定かではない

小高い丘を疾走する一人とそれを追う漆黒の騎士

「しつこいぞいやつ〜」

未だに山のような荷物を一つも落とさず走り続ける慎

「取り合えずお前逃げる。何とか足止めするから救援頼む」

急停止と同時に掌を騎士に向ける

「エアロー！」

騎士の手前に着弾した空氣の塊は粉塵を巻きあげ一時的に視界を奪つ
その一瞬の隙に横に飛び退き空に向かい連續でアイスを打ち続ける。
その結果巨大となつた氷にエアロをぶつける

「氷柱雨、即席だから勘弁な」

降り注ぐ氷の刃は容赦なく大地に突き刺さる

「つつても効く分けではないがな」

砂塵が薄れ現れたのは無傷の騎士

地に突き刺さる剣から吹き出す魔力

「ふん。こんな低級呪文で傷なんか付く分けあるまい」

「その剣は確かに舜黒だな。伝説的な聖天子の裏の剣と言われた宝刀」

「知ってるのか」

「無論な。犠の血を刀身に纏いし時、主に力を注ぐ。犠の肉体に刀

身を纏いし時、主守りし地獄の盾。最悪な魔剣だよ

「はつ。なら話ははえー。素直に殺されろ」

真つ直ぐ突きつけられた刃を眺め溜め息を吐く

「俺は戦闘より交渉向きなんだよな」

地に手をつき魔力を注ぐ

「時間稼ぎだ。アースバウンド！」

亀裂の走る大地は霞を中心に拡がり、大地を削り弾け飛ぶ
更に先程のアイスは宙に逃げる騎士に向けて突き進む

「ぬるいわ！」

力任せな振った魔剣から吹き出す突風により氷の刃は無散し、勢い
劣らぬ突風は霞に襲いかかる

しかし霞は笑う

「我、悲しみに潰され、それど慈悲により声のみの存在となりし精
靈。エーヴー！」

衝撃波が大地を破壊するがそこに俺はない

何処を狙っている？

「クソッ！何処へ消えた！」

後ろかもな？

騎士は振り向き様に一閃するが虚しく空を斬る

おいおい信じるなよ。敵だぞ一応

「黙れ魔王！そこか！」

突き出している筋を粉々にするがそこにも俺はいない

元々さつきの場所からほとんど動いていない
エローは姿を消し、音を反響させるものでアースバウンドもその為
の前準備みたいなものなのだ

「仕方ねー。この辺一帯吹き飛ばす！」

騎士は大量の魔力を魔剣に注ぐ
あれだけの魔力、恐らく深姫と並ぶ魔術師だろう
ぶつちやけやばいよ。そろそろ救助来るころなんだけどな

目に見える魔力を一点に集め振り下ろす

「ちょっと待ちや～～

空高くに舞う一人の男は雄叫びと共に自由落下していく
「つづついいいいいいいつやつふ～～～～～～～～～！」

着弾すると大地はへこみクレータを作る
後方に飛び一撃を避ける騎士

「な、なんだ！」

「アライアーマント」

一応助かりました

姿を現して慎の隣に行く

一遅いぞ慎、危うく落し飛ぶところだつた

「ああ悪い。実は帰ってる最中に卵を落として」

「ぐあつ、やめろ霞！俺達は仲間

内法廷により私刑？しかも極刑！うわ独裁法廷だ！反対反対！独裁

アーノルドの懐中電球一匹の壁へ落つてあ

「罪の重さを知れ！」

そこへ駆け付けた三強はあえて慎を無視する

「何があつたの霞」

騎士は由断なく魔剣を構える

「でも霞君、ホントに戦うの？」

「そ、うよ。見る限りかなり出来るわよ」

「まあな。しかしあらなきや涯まで追つてくるシシロサだ。そこで

騎士

まへり近付き数歩手前で止まる

「俺は5対1なんて卑怯者戦隊みたいな事はしたくない。そこで丁度改めてタイマンで勝負つてのはどうだ。見る限りさっきの町でも暴れたんだろ。仮にも俺等は魔王の名前持ってるんだし万全な状態でもなきゃ面白くもあるまい」

「…………ふん、よからう。詳しい日程は
「明日の昼に直接伝える。場所はイルノア中央噴水でだ」
「よからう。ならば俺も漆黒の狂騎士として名乗る」

騎士は地に魔剣を突き刺し高らかに吠えた

「我的名はアウグストウス！力求めし霸邪の騎士なり」

アウグストウスは漆黒のマントを翻し、イルノアへと向かつていった

さて、只今重大会議の真っ最中。まずタイマン勝負のやり方

「議長、一日一試合はどうですか？」

「加弥議員、それは余りよくない。もし連敗すれば後の試合に影響する。ですのでここは一つ代表戦か彼に少し増えてもらう」

『は？増える？』

「まあそこは後々。次に試合の日だが何日がいい？」

「はい！一週間後！」

「重罪人慎に発言権はありません。今すぐ卵買つてこい」

「三日か四日もあればいいんじゃないかな」

「ふむ。では反対意見がなければ先塚議員の意見を採用します」

「それはそうとアウグストウスって男、あいつの剣つてかなりの代

物よね。それからあの鎧も」

「ああ。あの剣は反則級の魔剣、それとあの鎧は反則級の生きた鎧。
どちらもリスクは大きいが破壊不可能の世界に数少ない最上級武具
の一つだ」

鎧の名は異懲いかくの獸鎧。

力を求めた妖術師が命と引き替えに鍛えあげた鎧。その鎧を着ける
限り痛みを奪われ己の命を代価に魔力を『』える

「取り合えず相手に交渉してみるから」

俺は部屋に戻り電話を取りとある場所に電話する

「どうも霞です。実は折り入つてお願ひがありまして」

さ、商売商売

試合当日、指定された場所に来たアウグストウスは絶句していた

広く整備された闘技場、割らんばかりの歓声、そして異人慎のアナ
ウンス

「さ～東門から現れたのは国々を渡り歩きその名を轟かせ幾多の軍団をその剣で螺子伏せた屈強にして孤高の魔人！人は黒い悪魔と叫び、人は惡夢の襲来と叫び、人々を恐怖に染めた漆黒の狂騎士。アウ～～グス～トウ～～ス！！！」

大地の揺るがんばかりの歎声、そして次々と投げ込まれる投石類。しかしそれは見えない壁に全て阻まれ投げた本人に返つていつた「言い忘れたがこの闘技場は完全防衛陣を張つてゐるから黙つてれば被害はありません！分かつたか馬鹿共！！」

慎に向かつて投石開始

「慎く～ん、ちょっと逃げないでよ。あ！すいませんでした。今回防衛陣張つてます洗夜です。皆さん余り物を投げないで下さい」とすると投石はピタリと止み、床で悶えてた慎も復活、アナウンス再会です

「はあはあはあ、では次の紹介だ。西門から現れるのは現代の魔王霞！説明は省くぞゴラ～！」

ああ、終わつたら慎の命を貰うか

「さて、次は現れるのは紅き鬼神、朱の鬼姫。その姿何人も見えぬ神速の領域！可愛らしいその姿から思いもよらぬ一撃を放つ美少女！大早～～～か～や～～～！ぶつちやけ好きだ～！！！」

観客総出の歓声が会場を包む。大地を震わすとはこのことだ。

つうか慎、ぶつちやけ過ぎだ

「はあはあはあはあ、危うく意識が飛ぶところだつた。そして最後に現れるのが我等の黒き魔女。死神の代名詞を持ちその魔力と鎌は正に死神！逆らつたら最後、消し炭すら生ぬるい一撃で全てを消し去る魔王側近！大川～～み～～な～～！ふざけた紹介すいません。消

さないで！」

ならやるなよ

とまあふざけた紹介も終わつた事なのでまずは商売から

闘技場に設置された大型スクリーンに表示された数字

魔王 3、2倍

狂騎士 9、5倍

「おお～っと。なんと狂騎士のオッズ9、5倍！これは予想より高い！あ、はいはい。只今入った情報では狂騎士側の券の注文が殺到してゐる模様。狂騎士側が圧倒しております。残り時間は5分切りました。まだ御求めの方はお早めに券売場へどうぞ」

怒りを抑えながらアウグストウスは睨みつける

「おい、なんの真似だこれは」

「ああ、実はここ最近いろんな方が色々と器物破損を起こしどね。例えば変人が美術館壊したり、例えば鬼姫さんがナンパして来た男を叩きのめすついでに家屋7棟倒壊させたり、例えば魔術師さんが訓練ついでに私有地の山を4分の1程消してしまつて。お陰で俺のへそくりが極端に減つて財布が寒くなつてね。ちょっと稼ごうかと」

目を細めながら遠くを見つめる

後ろではバツの悪そうな顔をする一人

「過去を引きずるな！蒸し返すな霞！あれは仕方がばらはつ」

張つてある筈の防御陣を突き破り飛び掛る俺

「やめろ霞！その技は！その技だけはイヤメテヨ～～！！」

「慎、お前は何か勘違いしてるな。あれは立て替えただけだ。生涯

掛けて返しても、いつんだからな」「…………おー、ザビザビコド！」

はい「さひはせんでしたから、すみません」

「それじゃ狂騎士。始めるか?」

「ふん、わざとさう」

俺は掌をアウグストウスに向ける

我 忍の祖はじて漆黒の鬼 オンキミウヰ・

するとアウグストウスの影から二つの黒い固まりが浮かび上がり人の形になる

「そいつらはお前の意識通りに動く。力も魔力も全て同じだ。問題あるまい？」

「アリサ、お前が誰だ？」

突き出された大剣からは魔力が吹きて 大地を龍かは震わせる

「そ、それでは、魔王ＶＳ狂騎士。バトルスタート！」

氣力を振り絞つた合戦と共に大地が吹き飛んだ

総に振り降ろされた大剣を後方に避け三手に別れる
しかし既に先回りした影は横薙に一閃。加弥めがけ大きく振り抜く
「ふふん。遅いよ」

間近に迫る大剣に千角の刀身を添え、大剣を滑るように宙を舞う。影の後に着地した加弥は身を屈めその上を大剣が勢いよく通過し、再度後方に跳ぶ加弥が先程までいた場所には大剣が突き刺さっていた

「乙女に一人掛りつて酷くない？」

「あら、もう弱音？」

影は先程突き刺さした魔剣から素早く魔力の壁を展開し、その壁に次々と灼熱の嵐を叩き続ける

空を舞う深娜は右手に持つ断罪の鎌に魔力を注ぎ二つの影に向けて大きく振り抜いた

「バカね。魔法使いの攻撃が全て魔法とは限らないのよ」

断罪の鎌に注がれた魔力は鎌をそのまま巨大化させたように膨れ上がり大地を薙払う

舞い上がる砂塵を見つめ深娜は舌打をして加弥の隣に降りる

薄れる砂塵の中には大剣で防ぎ全くダメージを受けていない二つの影がいた

「卑怯と思わない？あんな武器」

「あれ～深娜ちゃん、弱氣？」

二人は油断なく構えた

「ま、頑張ろ～か？霞の事は一時休戦つてことで」

「何を休戦するのか分からぬけど。まあ仕方ないわね」

二人は同時に動きだした

対峙する魔王と狂騎士

「はたからみてどうだいあの二人？」

「強い。流石魔王の一員と言つたとこだな」

「微動だにしない二人

「ぶっちゃけ俺一番弱いんだぞ」

「はつ、冗談にしては笑えんな。仮にも砂地の魔女の指南を受けたんだろ」

うわっ。情報漏れ激しく

「はつきり言つてあの女には今でも勝てん。化け物だ」
物凄く渋い顔になるアウグストウス。まああの人は本当に怖い。平
氣で人を生き埋めにして三日ぐらい忘れる人だ

「さ、始めるぞ魔王。示せよその力！」

まあ負けたら後々大変だし本気を出すまでだ

「御相手しよう俺の敵。ああ示そうじやないか細やかな力を。謝つ
ても遅いがね」

狐面を着け深く息を吸う

「取り合えず負かす」

素早く懐からナイフを抜き放つ

それをものともせず真っ直ぐ突き進み魔力を注いだ魔剣を振り抜く
剣から放たれる真空の刃が無数に放たれ大地をズタズタに引き裂く
しかし全てギリギリで避け無傷で地を蹴り宙を飛び叫ぶ

「示せよ！原古の氷と霜より生まれし世界の祖の巨人ユミル！」

突き出す手の先の空間が歪み黒色の巨大な拳が闘技場にめり込み狂

騎士を襲う

「グツ・・・、な、舐めるな！」

力任せに振り払い空へと突進する

しかしそこに霞の姿はなく既に大分離れた位置、加弥と深姫の後に移動し構える

「御一方、苦戦しそぎでは？」

「だつてこいつの鎧硬すぎだもん」

「それは分かるが頭を使えばよいではないか」

「霞、無理なものは無理なのよ」

「深姫ちゃん、今遠回しに馬鹿にしたよね？」

「気のせいよ」

「まあ頑張れ。頑張つたら」^こ褒美でもあげるから

二人の肩をポンと叩き狂騎士の方へと跳ぶ

半ば呆然としていた二人は力強く大地を踏みしめる

『さつさと掛つて来なさい！血祭りよ！』

現金な彼女達だった

「さ、仕切り直しだ。ついでに教えとくけどさつきの攻撃が今出せる割と全力攻撃だから」

「貴様、わざわざそれを教えてどうする?」

「まあなんだろ。魔王の余裕?みたいなもんかな」

忍笑いの後肩から力を抜き相手を見据える

「魔女直伝の卑怯技。見せてやるよ」

ゆっくりと歩き右手にナイフを構える

「はっ、見せてみろ!」

カツという地を蹴る音と共に一瞬で後に回り込み上段から一気に振り下ろす

それをギリギリで避け距離を開け地に手を付け少量の魔力を注ぐ

相手の攻撃を最小限の動きで避け次々と魔力の拠点を増やす

「さつきから何をチマチマと。やる気はあるのか!」

しかしながら一つ語りらず無数の縦断、横断、袈裟斬り、突の連撃を避け続ける

とその時異常な破碎音が響く

そこには黒影と鮮血に染まつた骸の山で型どられた巨大な門が聳え建ち、そこから田へ長い白骨の腕が伸びている

「開きなさい。闇より拡がりし地底の世界。飲み込みなさい、冥界の闇よ!」

白骨の腕は獲物を見定めたかのように動き、五指は一瞬で影の騎士を地に縫いつける

「な、なんだあれは!」

驚きを隠せないアウグストウスを横目に笑う

「俺よりも遙かに強い魔王の仲間だ」

押さえ付けられた影の周囲から数百、数千と数えれない程の骨の手が影を掴み地は割れ紅く染まる冥府に引き擦り込んでいく
ゆっくりと地は戻りそこに初めからなにもいなかつた静寂に包まれる

「はあ、これかなり疲れるのよ。後は任せたわよ」

そう言って立ち去ろうとする深姫を捕まえたのは他でもない。俺だ
右手を膝裏に通しもう片方の手で肩を掴む
いわゆる御姫様だっこである

「すまんな深姫。今残ってる魔力分けてもらうよ」

慎や洗夜がいる司会席に飛びながら肩を掴む手に力を入れ強く引き
寄せ膝裏に伸ばしていた手を素早く離し深姫の手に指を絡める
手を通して流れる魔力を調節し、手を離して再び御姫様だっこ

そして司会席に深姫を座らせ闘技場に戻る

椅子に座らされた深姫は完全に思考回路がオーバーヒートを起こし
何が起きたか未だに理解出来ず呆然としており、洗夜は涙目で深姫
をガックガック揺らしている

そんなことを知らずアウグストウスの前に降りた俺は先程貰った魔
力を掌に集める

「さ、ラストバトルだ。止めるかなこの一撃？」

「黙れ！さつきからこざかしい真似ばかりしやがって。消してやる
！」

ありつたけの魔力を魔剣に注ぎ地に突き刺す。

この魔剣から吹き出す魔力は地に流れ込むと同時に周りに溢れる魔
力を吸収して再び魔剣に戻ってきた

普通ならばこの時点では魔剣の力は数段強くなり、たとえ洗夜の最大防御でも防ぐ事は難しい一撃必殺となる
しかし今回は違う

戻ってくる筈の魔力は逆に狂騎士の周りから溢れ黒い影となり絡み付く。締め付ける影は狂騎士の動きを完全に封じ始めた

「ぐつ、な、なんだこの影は！」

力任せに引き千切ろうとするがビクともしない

「いや～いい眺めだ。どうだい俺の罠の感想は？」
さつきから地に注いでいた少量の魔力は魔力に対する直接的な関与がなければ発動しないトラップである。一個だけではさして強い束縛は出来ないが複数にもなれば余裕で狂騎士を押さえることができるのだ

「さてさて。動けない君をどういたぶろうか？」

邪悪一色の声に動じることなく睨み続けるアウグストウス
彼は強い。肉体的にも精神的にも
だからこそ面白いのだ。こいつが慌てる姿を見るのが
「あ～。あの人の性格が少し染み込んでる。少し大人げないけどいいか」

そう言つて手を叩く

すると俺等の入ってきた門が開き、一人の少女が歩いてきた
あまり状況が理解出来てないらしく脅えながら予め指示された俺の隣に来る

「アメリカーー！」

「そうだね。君の唯一の肉親の妹さん。いや～大変だったよ。ここまで来てもらうのが」

仮面を外し更に邪悪に笑う

「さて、今の君の立場は分かるかな？」

「き、貴様外道か！」

「おいおい何を言つてゐる。さつき言つたる。魔女直伝の卑怯技つて。勝つためなら何でもしろーあの人はそう教えたんだぞケーケツケツケ！」「

我ながらアホらしい笑いかただ

「に、兄さん。私、もしかして大変な事しちやつたの？」

不安な表情のアメリカ

「さて、どうする？君が降参しなければこの子は彼処の馬鹿フェチ慎にプレゼントだぞ？」

「マジか！マジか霞！ひやつぼ～～～！まつくる狂騎士～～戦えよ～～戦つちやえよ～～！」

「ふざけるな貴様！ハツ裂きにするぞ！」

マジギレする男は今までで一番キレイている。拘束している影がギチギチ音を鳴らしている。ヤバいや、こなままだと破られるな

「ま、冗談は置いといてだ、ぶっちゃけ降参しろ。まだ奥の手をいくつか用意してるが流石にアレは卑怯以前に人として使いたくない物ばっかだからさ」

「馬鹿か！俺は自ら敗けを認めない。勝つか死ぬかなんだよ～！」

「アレを見てもか？」

指差す方には黒い影に馬乗りになりひたすら殴り続ける加弥がいた。殴れば影の足がビクンと震え、地面の亀裂が伸び、観客は皆視線を反らしている

「霞が深姫ちゃんを御姫様だつこ霞が深姫ちゃんを御姫様だつこ霞が深姫ちゃんを御姫様だつこ霞が・・・・・」

まるでお経の様に唱えるその姿は恐怖以外のナニモノでもない

「な、だから降参しろ」

「断わる。敗ける時は死だ」

「うわっ。あれ見てもまだ言うか？」

「あつそ。なら慎～」

「それだけは止める！妹に手を出すな！」

「つたくメンドイな、そんなに自國の王が嫌いか？」

「なつ！なぜ貴様がそれを」

「調べりや分かる。確かに彼処の國の軍事力は半端なくでかいが何も力で向かわなくてよからうが。どうせ後数日で崩壊するんだ。頭を使え頭を」

ちよ～つと御偉い様と話してちよ～つとトアル物をチラッと見せて終了

「つうか殺しはせん。どうせ砂地の魔女と同じ事言われたる、後味が悪いって」

図星らしく反論出来ずに黙る騎士

俺はアメリカの肩をポンと押しアウグストウスの隣に行かせる
「妹さん。あんたの兄貴しつかり見張ってくれよ。止められるのはあんただけなんだからよ」

先程深姫から貰つた魔力を使い魔法陣を描く
「魔女にお願いして一人の國に魔力の結晶を置いといつもらつた。つうわけで帰れ狂騎士」

「ふざけるな！まだ貴様と決着がついてね～！逃げるのか！」

「はっ！妹一人で取り乱すお前の敗けだ！出直してこい！つつも引き越すから当分会わね～けどな」

「糞野郎が！絶対に逃がさん！何処に居ようが必ず見付だして殺してやる！」

俺は二コヤか笑い手を振る

「やだね。死にたかね～よ。一人で修行しろ」

徐々に薄れる二人を眺めながら欠伸をして言つてやる

「家族には心配掛けるなよ」

「黙れ糞野郎が！」

そんな声が聞こえた気がした

さて、静かになる観客席を眺めながら慎の方を向く

「勝者はどっちかな?」

「ヤリと笑う慎はマイクを掴み叫ぶ

「Jの勝負、チーム魔王の勝利つ!!」

再び沸き上がる会場。その過半数がブーリングである。まあ賭けに負けたんだろうな

後は一番危険な加弥を戻しますか。影は消えたため一人寂しく地面を殴る

「ずーん。ばーん。ビーん。ちゅーん。

いや、止めるかな

ゆっくり近付いて加弥の隣にしゃがむ

「どうしましたお嬢さぐきああ

もう殴られゴロゴロと転がり気付いたら加弥がマウントポジション! 顔面狙ってくり出す拳を首の力だけで必死に避ける! 避ける! 避ける!!

「霞が深姫ちゃんを御姫様だっこ霞が深姫ちゃんを御姫様だっこ霞が深姫ちゃんを御姫様だっこ・・・・・」

怖っ!

「か、加弥! 話を聞け! まずは落ち着つおおお(ばーん)頼むから少し落ち着むつおうい(ずーん)

仕方ない。ここは一発賭けに出るしかあるまい!

右手が振り下ろされた瞬間首を持ち上げ加弥の耳元で囁く

「・・・・・・・」

ピタッと動きの止まる加弥。田は徐々に正気を取り戻していく

「・・・・・・マジっ」

「マジ」

はみゅつ

いや、抱きつかないでよ

なんとか立ち上がるが加弥は首にぶらーんと釣り下がっておりその目は何かを訴えている

「わかつたよ。だつこだろ」

溜め息混じりに加弥を御姫様だつこ

あ～あ、空に積乱雲が集まってきたよ。絶対雷落ちるよ。絶対洗夜の雷だよ

諦めた俺は換金場所めがけ全力で走り去った

「霞君のバカ〜！」

落雷×

結果としてボロ儲けです。皆の借金立て替えが後四回は余裕で出来ろ程儲かつた

その一部はあの狂騎士の家に送つておいた。ま、気休程度の慰謝料つてことでだが

そんなわけで帰つてきた俺は早速シャワーを浴びて着替える。いつもの司書服もいいが黒のタキシードも中々捨てがたい等と考えながら下に降りる

案の定深姫と洗夜は田を丸くしてポカーンとしている

「何その格好。何処に出掛けた氣？」

「霞君かっこいいよ。凄く似合つてる。でもなんでそんな格好なの？」

二人の質問にどう返答するか迷つていると奥から可愛らしいお嬢さんが歩いてくる

白くて少し薄いワンピースを着て、長い髪を靡かせてる。可愛らしいピンクのポーチを持つその姿はどこぞのお嬢さんです

「お待たせ霞君。や、行こいつか」

超御機嫌な加弥は腕を絡め二口二口笑う

なんと言つか俺の髪も長くなつてきてて絵的には可愛らしい妹とタキシードのお姉さんみたいな気分だ

「・・・と言うわけだ。こうでもしなきや抑えられなくてな。埋め合わせはするから今は見逃してくれよ」

言い終わると同時に家から飛び出る

後ろからは鬼の叫び声みたいなものが聞こえるが隣の天使だつて一步間違えば鬼に変わるんだ。どっちに行つても死に変わりはないんだよな

悲しみに打たれながら今は加弥の御機嫌を取ることを優先する悲しき魔王だった

しつこい人程意外に根はいい人かも？（後書き）

あれですねすいません。暇神様の案と妙に進路がズレて結構コメダ
イつてました。

ほんと申し訳ないです。それでも楽しんで頂けたら幸いです
それではまたこの場で御会い出来ることを願つて

影で頑張れる人程強い人？（前書き）

はい。お久し振りです。ウドの大木です
今回は闇光様の提供です。長らくお待たせして申し訳ありません。
作者は土下座してるので許して下さい

それではどうぞ

影で頑張れる人程強い人？

男は地を蹴り、鍛え抜かれた強靭な腕で振り上げた大剣を標的である男に振り下ろす

「滅びろ！貴様はこの国に在るべき存在ではないのだからな！」

だがその大剣はガラスを碎く様な音と共にあっさりと碎かれた

それは同じ素材で出来た鉄をぶつけた訳でもなく、魔力による絶対防御でもなく、ましてや大剣が既に壊れていた訳ではない

「つたく毎回しつけーんだよ！特にお前！一回三回の襲撃はしつこいだろ！」

それは拳である

利腕の右でいつも容易く鉄を碎き、左の拳で相手の胸骨を碎かない程度の威力でぶん殴る

男は悲鳴と言うよりも情無い泣き虫小僧の様な泣き声を残し急斜面の崖から転がり落ちていった

後三分で飯の支度だなーっと考えながら崖を這上がつて来る先程の馬鹿に飛び膝蹴りをかました

「霞（くも） おかれり！」

「へいへいちよい待ちや～。よつと」茹でた麺を椀に乗せ板に乗せる
椀は板をスルスル滑りテーブルの真ん中で止まる。加弥は麺を取る
と椀を強く押して戻す

「おつかわり～」

「はいはい」

同じ行程を繰り返す

最後に食べれるのは俺である。残った麺と野菜を炒め昼食を済ませる

そしていつも通りコーヒー片手にソファーに腰掛けテレビをつける。
いま丁度始まつたのは匂の連ドラ『みかわやと奥さん』だ。これで
もかつ！と言う程ドロドロで奥様方に大評判らしい

直ぐにチャンネルを変え教育番組の『科学実験室』を見てみる。確
か今日の課題は寝てる人の鼻に指を突っ込み捻り上げたらどんな奇
声を放つか？だったな

テレビの向こうでは寝てる議員に今までに仕掛けようとする科学員
が映っている

「ふがああはあああ！……！」

見事な一撃だつたらしい。議員は鮮血の濁流を撒き散らしながら転
がり回つてゐる
心がスッとした

神妙に頷きながら「コーヒーに手を伸ばす俺の背後に誰かが忍び寄つてくる。まあ足音ですぐ分かる

「かすみー。将棋で勝負だー」

ほ〜ら加弥だ

「加弥、俺その将棋嫌いだぞ。なんだよ『角』が成つたら『核』つて。成つたら周囲三マスドーンで灰になるつて」

「えー。まだマシなの買ったのに。他のだと飛車が火車で三列一直線消し去るとか王が嘔で近付けないとか。」

「待つて、なんで普通の将棋がないのかな！しかも核二つ使っても俺に負けた加弥はまだ戦う気？また王だけ残して総攻めでもしてやろつか！」

「うわ〜ん。また霞がイジメル気だー」

泣き真似する加弥を無視してコーヒーを飲む俺

見事に逆ギレした加弥に殴られた

それから結局将棋をするハメになり、見事に手加減なしで完勝した
俺を殴った加弥

そして俺は頬を擦りながら夕日が東の空に沈むのを眺めている
無論ただ眺めてる訳ではない。掌に魔力を集中させイメージを練り上げる

「まだよ。もっと魔力を放出して練り上げなさい」

深娜は模範を示す様にあつと言つ間に俺より密度の濃い魔力を練り上げた。なんとなくへこんだ

「いい？そのまま形状を想像して留める。そうすればこんな感じに」

深娜の魔力は一瞬で2メートル近い大鎌へと変化した
魔力によって精製された武器には重量がほとんど無く、魔力を持た
ない物体に対して最大限の威力を發揮する

「分かつたらやりなさい。今は精々ナイフ程度が妥当な所でしょう
ね」

くつ、なんか知らんがイラッとするな

その気持を集中力に変えイメージを型として練り上げる

俺の右手に集まつた魔力は淡い蒼の閃光を放ち徐々に形となつてい
く。後一息といったその時、夕日を背に物凄い速さで何かが飛来し
てくる

とてつもない速さで空気が破裂する音も続いている

とつさに横に飛び退き、深娜を押し倒す形でなんとか避ける
一瞬で自分のいた場所を通過した何かは見事に慎の小屋を破壊して
地面に突き刺さり漸く停止した

「…………なんだいつたい？」

粉塵を上げて停止した何かの方を向いて首を傾げる
「ちょっと、早く退きなさいよ」

俺に押し倒されている深娜は頬を少し赤らめながら睨んでくる

「ああ、悪い悪い」

素早く深娜の上を退くと誰かが俺の背を軽く叩く。ゴシゴシした大
きな手だ

ゆっくり振り向くと地面から伸びる筋の腕だ

「・・・・・」

若の腕は親指を下に向けてグツ！とすると力一杯に頭を殴りつけ、地面に横たわる俺を地中に引きづり込み晒し首にされた

あ、窓から洮夜が手を振ってる。あははは、なんだろあの光の塊は
・・・・・

「うわああ！まさかの光の鉄槌だあああ

四メートル近くまで膨れ上がった光の鉄槌は一直線に降り下ろされ俺を飲み込もうとしている

グッバイ、マイ人生

しかし光の鉄槌は直前で停止した

正確には止められたのだ。銀色の折り鶴に

「折り紙？」

光の鉄槌は折り鶴に吸収するかの様にどんどん小さくなつて消えてしまい、変わりというよう折り鶴は吸い込んだ光を俺に吐き出し、首から下の土を吹き飛ばした

深娜は何が起きているのか全く理解できていないなか啞然としている窓の洮夜も足早に階段を降りてきている。壊れた小屋からは人の手らしき物が伸びている。後半は無視しよう

銀色の折り鶴は俺の目の前でゆっくりと解け、一枚の紙に戻る

「・・・厄介だね～」

そこには短い文が書かれていた

『明日朝早くに行くから出迎えよりしく～ b や千鶴ノ』

山脈の上空を高速で移動する一つの影

それは空飛ぶ絨毯ではなく、まして空飛ぶベットでもない

「飛べ～、真っ白い木綿～～。火が付いたら焼け焦げる～

それは真っ白い布だった

「飛べ飛べ木綿～マッハの速さ！口調はいつも九州男児！」

砂地の魔女、千鶴ノは布には不自然な赤いスイッチをポチッと押した

「おに太郎は～ん。助けに来たとば～い」

奇怪な布の乗り物は霞家を田指し猛スピードで天を疾走して行く

間違いと書く名の暴挙をするために

深夜2時、太陽は勿論、風の音以外何も感じられない闇の中、霞家上空には真っ白い木綿が浮いていた。若干角が焦げているが闇のおかげで見えない

「到着だおに太郎は〜ん。きばつてきや〜」

天高くで奇声が響くが誰も気にしないので無視しよう

砂地の魔女は五枚の札を取り出した

その札には奇怪な文字が並んでいる

「さ〜てここからが腕の見せどこの」

五枚の札にふっと息を吹きかけ空に飛ばす

手から離れた札な風に乗り宙を舞い、まるで意思が有るかの様に霞家を囲むように五点に落ちる。札は大地に降り立つとその場で直立になり淡い光を放つ

「ホントなら直ぐに出来るんだけど家の中に優秀な魔術師さんと僧侶さんが居るからな〜」

下手に魔力を込めて発動したら寝てても起きてしまう。そしたら確実に邪魔される

だからこそ少ない魔力をゆっくり注ぎ練り込んでいく

「だけど待つだけの価値はあるのよね〜。霞と二入つきりになれるんだから頑張るぞ！」

私怨の塊を掲げ、千鶴ノは古代呪術を開始した

朝日が上り始めた午前5時半、最初に目を覚ますのは決まって俺である。重い瞼を押し上げ伸びをして布団からゆっくり這い出る寝癖のついた頭をかきながら洗面所に向かい冷たい水で顔を洗い幾分かスッキリしてからやかんに火をかける

部屋に戻った俺は適当に服を選んで着替。そのまま玄関へと向かう「そろそろ到着するころかな。もう少し遅くてもいいのに」溜め息をついて外に出ると冷たい空気が肌を刺す

ゆっくりと朝日に目を細めながら田課の体操を始めた

キタキタキター！！

遂に力スミンが出てきた。今よー今こそ古代呪術発動よー！

「今こそ呪術解放を命ずる。主に逆らいし罪人に一滴の救いを。主を愚弄する罪人にささやかな慈悲を。主を認めぬ罪人に救いの試練を」

地に立つ札は陽炎に包まれ歪んでいく

「試練の時よ、罪人に裁きを。試練の時よ、罪人に戒めを。試練の時よ、罪人に試練を！」

最後の言葉を吐いたとき、千鶴ノは大変な事に気が付いた

霞が足早に家の中に走っていく

「あああああ！霞が！霞が家の中に～、ストーブ、ストーブ霞いいい、呪文は急に止まらない」

何故霞が家の中に走ったか。それはやかんが沸騰してピーーと鳴いたからである

そして家中で寝ていた三人と、柱に縛りつけられ熟睡する男と家の主は忽然と姿を消した

目を覚ましたのは深姫だ。少し肌寒いと布団を引っ張りつとして空を掘み、疑問を覚え目を開くとそこには鬱蒼とした森が広がっていた

「…………え？」

深姫は自分がまだ寝惚けてるけどと思いつ、近くに転がっている慎の耳をクリティカルに捻った

リアルに奇声を上げたので夢ではないと確信した。だが未だに理解できないのはやはり何故こんな場所に自分がいるのか

奇声を上げたモノから手を離し辺りを見回すと近くに加弥と洗夜もいた。パジャマ姿の二人は縮こまりながらモゾモゾと布団を探し手を左右に動かす。しかし何も無いと確信するとゆっくり転がる様にして近付き二人してくつきながらまた熟睡し始めた

呆れて目線を反らすとそこには巨木を眺める霞がいた

「おはよ。生まれて初めての最新目覚めを体感したと思うが気分はどうだ?」

「勿論最悪よ」

「だろうな」

苦笑いをする霞は巨木に触れゆっくり息を吐く

「今分かる事は俺達は全く別の場所にいること。更に此処では魔力

を精製する事は出来ない」

深娜は試しに最大出力の魔力を放出してみたが上手く練り上げる事が出来ない。内に有る魔力が上手くコントロール出来ない

「それで、これからどうするのよ」

「取り合えずそこの三人を起こしてからだな」

縮こまる一人を軽く叩いて起こし、草むらで伸びてる慎の耳をクリティカルに捻つて起こし、今は現状確認である

「しかし慎、お前はなんて格好で寝ていたんだ」

「仕方ね〜だろ。寝床が壊れて着てたの洗濯してたから着替がこれしかなかつたんだよ」

秋中頃の肌寒いと気候の中、半袖短パンのチビマッシュル。まさに奇怪である。全力で無視する

一方加弥と洗夜はピンクと白の暖かそうなパジャマ姿である。しかし深娜だけは割りと薄い生地らしく、肌寒そうに体を摩つている

「なんでそんな薄着なんだ？」

「私はいつもある程度の保温術を使つてゐるよ。今は魔法が使えないから仕方ないのよ」

「保温術つてなんとなく現代の湯たんぽみたいだな」

「帰つたら消し炭になりたい？」

「聞かなかつたことにしといてくれ。詫びにほれ」

俺は自分の上着を深娜に渡してやつた。千鶴ノさんのトコで色々稽古つけてもらつてある程度の気候の変化には対応出来る様になつたからな

深娜は暫し俺の上着を見た後、袖を通して着心地を確かめる様に裾を引っ張る

「…………ありがとう」

短い礼を言つてそっぽ向く深娜は若干顔が赤かった

なんて事を考へると左右の腕に暖かい感触が広がる
「かすみ～。私も寒いからくつひいていいよね～。断つたら捻るよ？」

「霞君、いいよね？駄目って言つたら泣こちやうよ～？」

断る事の出来ないお願ひ無言で肯定するとそれつきまで触れていた巨木が風もなくざわめきだした

か・み・かすみ・・・じぐる・・・ち・のだよ・・・・・

雜音混じりのこの声に聞き覚えがある

「千鶴ノさんですか？」

れいれ・・・やつた・・・しん・いしたん・・・ね・・・ちよつと
つづし・・・わるいか・・・・えいやつ！

巨木のざわめきは収まり静寂が戻る

「やつほ霞～。おひわ～。千鶴ノぢゃんだよ～」

「お久しごりです災害の元凶。どうせこんな状態になつたのは彼方のせいでしょう？」

「うぐう」と唸る千鶴ノは直ぐに開き直り現状を説明した

分かつた事は今いるこの世界は架空の世界であり、戻る方法はこの世界の創造者の未練を断ち切る

もしこの世界で命を落とした場合、この世界の呪縛に縛られ続ける
「後ね、もう少しで通信切れちゃうから必要な物言つてよ。頑張つてそつちの世界に送るから」
『まずは洋服！』

いつもの装備に戻った四人と何故か蒼の着物姿の俺
イジメか？仲間外れと言う名のシンプルbullying.
「霞、一人テンパつてないで今後の動きを決めるわよ
bullyingだ！」

結局千鶴ノさんの通信は『帰つてきたら一人でイチャイ・・・・・』
で途切れた

帰りたくないなーと思ひながら森の中を突き進んで行くと森が開け、

小さな小屋が見えた。小川の隣に建つ小屋からは人の気配を感じない

「「めんぐださーい」

戸の前で呼び掛けてみたがやはり返事はなく、ただ小川のせせらぎが聞こえるだけだ

「霞、どうするの？ その創造者つての見付けなきやいけないんでしょ？」

加弥は小川を覗き込みながら聞いてくる。洗夜も加弥同様に覗き込んで魚を見付けるとはしゃいでいる

慎も珍しく草原の上で普通に寝ている。普通に

「おいおい霞、何故普通を強調する？」

「お前ハンモックで寝てるけど次の日必ずグルグル巻きになつて宙吊りコクーン状態だろうが」

草原の上で嘔泣をする慎を無視する

その時後ろこちら視線を感じた気がして振り向く。しかしそこに広がるのは深い森しかない

何処となく違和感が残るも視線を反らし小屋に近付く

失礼と思つたが軽くノックをして戸を開ける

そこには小さな囲炉裏と戸棚、とても使い古された書物が並んでいる
「・・・・・住みて／なこんな家」

自然な感想を呟きながら部屋の中を見回す

人が生活しているのは確だ。見る限り囲炉裏の炭にはまだ熱がある。つまり少し前まで人が居た

そこに答えが至つた瞬間先程の違和感の理由が分かつた

直ぐに小屋を出て周りを確認する

今所変わった事は無いようだ。相変わらず小川ではしゃぐ一人と寝る奴

しかし深姫は辺りを見回している

「……霞、少しおかしいと思わない？何か視線を感じるのよ」

「俺もだ。恐らく誰かに見られている。それもかなり隠れ馴れしたプロだ。厄介だぞ」

吹く風に揺らめく木々の擦れる音と小川のせせりざわせ。ほしゃぐ声と奇怪な寝言が聞こえる

「深姫、三人を小屋の中に。俺は少し周りを調べてくれる」

懐から狐面とナイフを取り出す

「私も行くわよ」

「いや、深姫は三人と残つてくれ」

かなり不服そのので物凄い説得力のある一言を言つてあげた

「加弥と洗夜に変な勘違いされたら大変だぞ」

深姫はボディーに軽い一発をお見舞いして小屋の方に歩いていった

闇の中に溶け込む一つの影は此方に近付く者に視線を合わせる
今世界は自分の記憶を元に造り出している

遂に私の試練が始まった
未練を断ち切る試練が

だがそれは今いふこの者に掛っている

見極めねば

この者の技量を

見極めねば

この者の心理を

託す事の出来る者か

確實にいる

気配を押し殺して此方を見ている

まさか千鶴ノさんの修業がここまで役立つとはな

「先程から此方を見ている者よ。そちらから敵意は感じていない。
もし良ければ姿を見せて貰えないか」

返事はない

「私の名は野崎霞。半強制的に試練を受ける事になってしまった異
世界の住人だ」

やはり返事はない

「…………ならば此方から出向く事にします。先に言つておきます
すよ」

狐面でゆっくりと顔を覆いナイフを握る

頭の中でスイッチが入った。どうもこれを着けると容赦が出来ない
んだよな

「取り合えず本氣で行きますから
一気に感覚が研ぎ澄まされた

囲炉裏を囲む四人

バチバチと音をたててている。手をかざしながら加弥は一言

「メダカ」

「カラス」

慎はさつき森で見付けた茸をひっくり返す

「雀」

深娜は戸棚の本に目を通している

「メイプルシロップ」

洗夜は千鶴ノさんが送つてくれたボウガンをいじっている。魔法が使えないからこれで頑張れと言われて来たので操作手順を確認している

パヒヨツ！

「ひょおおおおおおおお……！」

和やかに時間が過ぎていく

ナイフが宙を一閃する

枝葉を切り裂き一直線に飛来するナイフを影は左に避け枝から枝へ
飛び移る

ピアノ線を付けたナイフを引き戻し低い姿勢で追跡する

速い。今だ明確な姿を確認出来ていらない

ただですら暗い森の中であれだけの速さだ

「かなり厄介だな」

視界の悪い中、足元を確認する事なく左右に木々を避け追い続ける

速い

それに予想以上にこちらの位置を読まれている

正確に此方を狙つて投げる刃物をギリギリで避けながら誘導していく

後少しだ

相手の足元に黒く塗装した縄を張り巡らせている。火薬を詰めた筒

を地中に埋めており繩に少しでも足が掛れば爆破する

見極めねば

命を預ける事が出来る者かどうか

後少しだ

そう思つた瞬間、狐面の者は奇怪な行動に出た

大きく踏み込むと宙に身を投げ出した

眼に気付いたのかと思つたがあの面では一帯の眼を回避するのは不可能だ

「これまでか・・・」

思わず漏れた落胆に沈みながら足を止める

ゆっくりと振り向き跳躍する者を見据える

高度が最高位に達して徐々に降下する

その筈だった

しかし狐面の者はそこからもう一度、宙に身を乗せてきたのだ

「なつ！」

驚きに一瞬身動きが取れなくなり、次の行動に遅れが生じたそれを見逃す者ではない。この短い戦闘で黒い影は悟っていた

予想通り狐面の者は懐から刃物を抜き、寸分の狂いもなく此方に放つてきた

「初めましてと言つたとこでしようかね」

俺の目の前には木に縛りつけられた人がいる。正確には左右の木にピアノ線を付けた一本のナイフを数本放ち、その中に位置する木に相手を押さえ付けていっているのだ

下手に力を込めて動けば人肌位容易く斬れる。それを分かつているのか相手は動こうとしない

「俺は名乗つた。彼方も名乗るのが礼儀ではないかな？」

「・・・夢幻だ」

「・・・女性でしたか。いやこれは失礼した」

俺は何の躊躇もなくピアノ線を全て切つた

自由になつた夢幻は一瞬で俺の背後に移動し、首筋に冷たい刃を突きつける

「・・・安易な行動は死に繋がるぞ」

「安易な行動ね・・・じゃあ聞くけど君の脇にあるのは何かな？」

俺の手にはナイフが握られ、背に立つ夢幻の脇腹に添えてある

「・・・抜け目の無い者だな」

夢幻は軽く飛び退き離れた枝の上に降り立つ

「私は夢幻。この世界を創造した者だ」

夢幻は顔を覆つていた黒い布を取り払つた

現れたのは長い黒髪を後ろで束ね、鋭い眼光を放つ女性
夢幻はクナイを懷に戻し腕を見せる

白く細い腕には朱色の網目模様が小さく浮かび上がつてゐる

「これが創造者の刻印だ。この世界の住人は全て未練を残して命を落とした者達の集まりで成り立つてゐる。そしてその中の一人、今は私だが未練を断つ試練を受ける者の創造により世界を作り替えるのです」

「つまりこの世界は君の未練を型どつてゐるわけだ」

俺は面を外し考える。どのような未練かは分からぬが最終的には本人の意思が大事らしい。本人の意思が折れれば俺達の努力は無駄になるわけだ

「厄介な世界だ」

深々と溜め息を吐きだしと何故か夢幻がこちらをじっと見ている
そして一言

「彼方も女でしたか。素晴らしい動きですね」

俺は猛然と抗議した

15分かけてコツテリ叱つてやつた

夢幻は非常に申し訳なさそうに枝の上で器用に土下座していた

「申し訳ない霞殿。私が未々未熟だった」

「もういいよ。それにしても霞殿つて止めてくれないか。なんかへんな気分だ」

「それは出来ませぬ。主たる靈殿を呼び捨てる事など出来ません

「・・・主とな?」

「私の未練。それは主を守り通すこと無く命を落とした事。故に私は今守り通す主が必要なのです。ですでのあの様な戦闘で靈殿を見極めておりました。御無礼御許し下さい」

「いや、まあいいけどさ。取り合えず小屋に戻りますか。仲間と詳しく話し合つて次の行動を考えたいし」

「承知しました」

小屋に戻つて最初に目に入ったのは、壁に縫いつけられた慎と、矢を一生懸命抜こうと頑張る洸夜だつた

「・・・慎、また新たなプレイに目覚めたのか。いい加減にしたらどうだ?」

「違う!断じて俺は放置プレイに燃えておらんぞ!」

「またそう言って。そう言いながら心の中で」

「だ・・・断じて違うぞ!」

「なんだその間は!」

「いや、自信がなくて」

取り合えず近くにあつた薪を投げつけた

「それで、その後ろにいる黒いのは誰かしら?」

振り向くと黒い布で顔を覆つた夢幻が立つていた

「夢幻、布取つたら」

「御命令とあらば」「
布を取つて素顔を出すと同時に飛び蹴りが炸裂した
無論標的は俺である。脇をえぐる様にくじ出された加弥の蹴りは俺
の肋を確実に碎く威力だ
しかしその間に割つて入つたのは夢幻だ

両手を添え力を全て無効にし、更に膝に腕を決めて軽く捻る
「主に対する無礼は許さんぞ」

「イタイタイタイタイタ！痛いって真っ黒！」

加弥は夢幻の腕を叩きギブつていた

直ぐに解放するよう頼むと渋々ながら加弥から手を離し一步下がる
「我が主に無礼を働くならばそれ相応の対応をさせてもらひからな
鋭い眼光で釘を刺す夢幻。そして夢幻に対する皺寄せは自然と俺に向く。敵意の視線で睨まれては恐くて仕方ない

「いや、止めてよ。三人そろつて睨まないでよ
『・・・・』
怖いよみんな

結局今田は全く話合いが出来ずに夜を向かえる羽目になつた

と言つが三日程進展がなかつた

しかし人間三日もたてば馴れるものらしい

今では六人囲炉裏を囲んでイワナの塩焼を堪能していた

「天然はやっぱ美味しいな。靈^ひお代わり」

「こら！主に何をさせるか！そこの小さいのにさせればよからう」

「おーい！チツサイはないだろー！心と夢と息子はおつきいぞ！」

周りが理解する前に小屋から叩き出し、小川に掛る水車に縛りつける

「靈^ひこれはマズブゴボゴボコボップハッ！マジでスマンかすミブグボクバタ……」

無視しよう

戻ると不思議そうにこちらを見る夢幻といつも通り気にしない三人

それから数分後、綺麗にイワナを食べた深姫は三日目初の進展を始めた

「そう言えばこの世界は彼方の未練の形なんでしょう？ならそれは何なのかしら？」

湯飲みから口を離し夢幻は押し黙る

誰も急かす事なくじつと待つている。夢幻も又、覚悟を決める様に深く深呼吸をする

「主、これを聞けば戻る事は出来ませぬ。よろしいですか？」

「構わん。それにここに居るのは覚悟をしつかりして連中だ」

夢幻は皆を見回し自らの覚悟を決める

「分かりました。全て御話します」

夢幻は湯飲みを置いて立ち上がり、戸棚の奥、小さな小箱を取り出した

中に入っていたのは鍔の先から折られた刀

「これは私が生前御使えた主の刀。妖刀虎ノ廻^{このえ}。一振りで流れる

濁流をも切り裂く豪刀だった業物だ」

「豪刀だった業物……ね。つまりその業物でも倒せない相手に・

・

深娜の問いに表情を曇らせる

「そうだ。主、名は套綴^{ヒドリツ}。私達は初代より套綴殿の一族を御守りしてきた。そして套綴殿はその一族の中でも一・二を争う強者と父上から聞いている。実際御会いした時もその威圧に圧倒された」

懐かしむ様に眼を閉じ苦渋に唇を噛む

「敵の名は百鬼夜行。幾多の鬼を従え名の有る強者を葬り去つた異形の鬼だ」

すると加弥は首を傾げる

「ねえ霞、百鬼夜行って聞いたことはあるんだけどなんて意味なの？」

「百鬼夜行。意味としては色々な化け物か夜中に列をなして歩く事。他の意味としては多くの悪者が傍若無人に振る舞う事と言われてるんだよね」

「霞君、その百鬼夜行？ だつて、それって確か日本のことわざだよね。つまりこの世界つて日本？」

「？ よくは分からぬが此処は江戸近くの山奥です。霞殿は御存じですか？」

「江戸・・・うん。分かつた。洗夜、ここは日本だね。確か今から約400年ぐらい前に始まった時代だ」

「それはいいけど、これからどうするの？ 相手の強さは分かつたけどそれだけで挑むのは無茶じゃない？」

深娜の最もな意見に二人は首を傾げ、もう一人は呑気に茶を煤つている

深娜の容赦ない湯飲み攻撃も夢幻がアッサリ受け止めお決まりになつた乱闘が始まる

明日辺りに江戸でも見物しに行くか・・・

飛び交う湯飲みや新を器用に避けながら茶を煤る霞だった

「霞へ助けべボゴボゴボゴボホー早くたすけばボホベボゴボゴボ
ガム」

さて、江戸の町中を歩く俺達を奇異の視線を送る人々
先に断つておくがまさか江戸の町中を鎧やら黒いローブやら修道服
なんかで歩くわけが無いその辺は抜かり無く夢幻にお願いして一般
的な服を調達してもらつたのだ

「なあ霞」

「どうした慎」

「いやな、皆朱とか黄色とか蒼とか色取り取りの着物じゃないか?」

「うむ。皆至極当然ながら似合つね」

「なら何故俺だけポルトガルチックなんだ?」

「む、気に入らなかつたか小さいの」

「霞! お前の部下じうにかしろよ、泣くぞー!」

「泣けよ」

小さいポルトガル人は隅ですすり泣くので蹴り倒し、近くの茶屋で一服することにした

「夢幻、この辺には百鬼夜行が現れるのか？」

「いえ。あの者は一定周期で町全体に出没します。おそらく次に現れるのは東側の方かと。それと常に数匹の鬼を従えてあります」

ふうんつと頷きながら団子を口に運ぶ加弥

「その鬼は強いの？見たこと無いけど一応私達元の世界じゃ結構強いよ」

「あう・・・私魔法使えないよ」

洗夜はちょっとヘコンで頭が下がっている

無限は食べ終えた団子の串を常人には見えない速度でポルトガルな人の後頭部に放つ

ポルトガルな人は振り向かないまま軽く弾く

「・・・・あの小さいのもそれなりに強いようだな

夢幻は漸くポルトガルチックな人を認めてくれたようだ

「あの者の従える鬼は側近の前鬼、後鬼。そしてその下に四鬼が就いている。風鬼、水鬼、金鬼、隠形鬼。どれも厄介な鬼だ」

「あれ？霞つて前にオンギヨウキっての言わなかつた？」

「言ったよ。忍の起源とも言われた鬼、オンギヨウキ。俺達の世界じゃ架空とされてたけどこっちの世界じゃ実在するってことだろ」
まさか本物に会えるとはね。苦笑いの後勘定を済ませ（ここは夢幻の貸し）一通り町を見て回つた。相手の出没地点での被害や行動、その他共通するような事柄が無いか調べあげた

「結果としてなんの共通性も無しで被害も大なり小なり。流石に女、

子供には手を出してないがある程度の技量を持つてれば容赦無しか

「それで、策士は何か思いついて？」

「アクション待ち」

結局それから三日ほど何の動きも無く、皆が皆で割と楽しく生活していた

例えば加弥はちょっとカワイイ簪を付けてはしゃいだり

深夜はちょっと珍しい料理に挑戦したり

慎は相変わらずポルトガルチックだし

「あんたは相変わらずね。いつまで本読んでるのよ」

「その棚の読むまで。言い返すがいつまで夢幻と睨み合っている」

『そっちが睨むから』

「さいですか」

もう馴れたので本に意識を集中するか

すると深姫は夢幻に首で表に出るよう指示する

「何か様か」

「ふん、白々しいわね」

そこは小屋から大分離れた場所であり、二人以外人の気配は無い

「…………何が言いたい。話が読めぬぞ」

「あら、白を切る様ね。生憎隠し事は私も靈も通じないのよ。あいつは何も言わないけど私は言わせてもらうわ」

深姫はゆっくり鎌を構え夢幻に向ける

「百鬼夜行について隠して居る事があるでしょ。少なくともまだ話して無い事がある」

夢幻は身動きせず内心の驚きを隠す

「どうやら図星ね」

深々と溜め息をつく

「別に隠すことなどないと言つ気はないわ。ただね・・・」

殺氣を含ませた鋭い視線を投げつける

「もしその隠して居る事で霞が傷つくなら私は容赦しないわよ

夢幻はゆっくり息を吐き頭を伏せる

「・・・・・いつから疑っていた?」

「彼方が鬼について話していたときに確信したわ。何故百鬼夜行の事を『あの者』と表現したのか。者ってのは人、人だったモノ、若しくはそれに類するモノを表現する時使うものよ。それに彼方が百鬼夜行の事を話すとき、必ず表情が同じなのよ。全部内側に押し込めて形だけと微笑なのよ」

「・・・・・何故私が形だけの微笑だと言い切れる?これが忍としての訓練の表れかもしけぬのだぞ」

「似てるのよ」

深姫は構えを解き視線を反らす

「悩んで悩んで、結局笑つて誤魔化そうとする靈と。何があつても内側に押し込めて形を崩せない私と」

夢幻はまだ覚悟する事が出来ない。例え主に嘘についてたとしても、それが知れた時を思えば言わぬ方が得策

「大丈夫だ。どんな事があるうと主を裏切る事はしない。例え我が名が夢、幻で在ろうと。主を守り抜くは私の信念だ」

夢幻の堅い信念に深娜は諦める。これは彼女の問題なんだろう

すると夢幻は今までと違つ意味で表情が固くなつた。そして一言

「あ・・・・・」

深娜は物凄く嫌な予感がした

土下座している

夢幻は俺に深々と頭を下げている

「・・・・夢幻さん」

「申し訳ありません。大変な事を伝え忘れていました」

俺の後ろでは三人ほど首を傾げ、一名は帰つて来て5度目の溜め息を吐き、夢幻を睨んでた

「百鬼夜行は普通の鬼と違はある概念を保有しています。あの者的一定周囲に居る者は自分の名に縛られます。本来名前にはそれぞれの立場や己を意味し、名は体を表すとされています」

「ふむ、確かに日本神話における神の名は立場を意味していたな」「はい。ですのでくれぐれも御気を付け下さ……！」

突然夢幻は町の方に顔を向け押し黙る

「・・・・どうした？」

「奴が現れました」

夢幻は直ぐに表へ出ると一直線に町の方へ姿を消した

しばしポカーンとしていた五人は慌てて夢幻を追つて行つた

「・・・今宵も宴か・・・・・・」

月明かりの下、一人の青年はひとときは大きい屋敷の上に降り立つた。黒く染まる髪をなびかせ深紅の着物に身を包む青年は腰に吊る笛に手を伸ばし

「ん？」

動きを止める

そこには同じ屋根に降り立つ一つの影があつた

「・・・・・久しいな百鬼夜行。滅びの歌を紡いだか

青年はふと笑い影を見つめる

「夢幻、今宵も宴が始まるぞ・・・・・踊り手は揃つたか？」

音もなく屋根から起き上がる黒い影

「ひらりの役者揃つたぞ？宴の踊り手は・・・・・いや、聞くも又無粋か

言葉を吐くと同時に屋根に四つの影が降りる

「夢幻、こいつが百鬼夜行か？」

「ああ、私の仇だ」

ちなみに残りの三人はちゃんと降り立ち、洸夜は律儀に（魔法が使えないから）階段を登つて来ている

「役者は揃つた・・・・・あ、宴の鐘を鳴り響かせよう・・・・・」

洸夜がタイミング良く屋根の瓦を外す音と共に一斉に動きだした

瓦を蹴る音が木靈する

そしてそれに続くのは破碎音の連續である

「つ！なんつう重をしてんだ、ダイエットしたらどうだ！」

慎を追うのはの四本角のいかつい顔に、黒く変色した血で染まる金棒を持つ赤褐色の肌をした鬼

そして立ち並ぶ家屋の影から浮き出る鬼

黒色の肌に異常に長い薙刀、一本角の険しい表情。そして腰には数人の頭蓋骨を吊り下げている

一本角は地を蹴り慎の走る高さまで飛び立つと横薙に振り抜く

慎は滑る様に身を低くして回避し、力強く跳躍

一瞬遅れで慎がいた位置に金棒が振り下ろされ家屋を玩具の様に軽々と破壊した

「金と隠か。なら加弥の方は風と水か」

慎は屋根を飛び渡り初めての武器を握り絞めた

加弥は全力で走っている。後方では大量の矢が飛来してくる
しかしその矢は水を凝固して造り上げた物であり、更にその勢いを
助けるのは意思ある刃の突風である

加弥は全力で走っている。脇に洸夜を抱えながら全力で走っている
「コウちゃん！足動かして！早く動かして！」
「はわああああ！速いよ～速いよ～」

小さい加弥の脇でパタパタ足を動かす洸夜

はたから見れば面白いが本人達は至つて真面目なのです。真面目な
のです！

「コウちゃん、せ～ので行くよ、せ～のつ！」

加弥は力一杯に洸夜を民家の屋根に放り投げ、振り向き様に千角を
構え幾多の矢を弾き、無数の刃を避ける

「かかってらっしゃい！手加減無しだよ！」

そこに立つのは一本角に紫色の肌で二矛の槍を構える水鬼
そして四鬼の中では飛び抜けて明るい色の黄緑肌を持ち、身の丈2
mを上回る長刀を構える風鬼

共に武器を構え絶え間無く殺氣を放ち続ける

しかし一鬼は突然構えを解いた

「引け」

複数の声を同時に話す様な声で水鬼は話しかける

「我等は女、子供は殺らん。自ら誇りを失う氣はない。引くがいい」

「・・・・・差別？」

「何と言われようと譲れぬ誇り。我等妖にとつて対等で無い者を殺すこととは同族殺しの次に卑しい事とされている」

風鬼は長刀を腰に戻し割と高い声で話す

「そなたが如何に強かろうと我等は戦えぬ。我等四鬼、最後の鬼神族として忘れてはならぬのだ」

「あ、あの~」

下の一人+一鬼は上を見る。洸夜が落ちない様に確り瓦を掘んでいる

「なら百鬼夜行の隣にいた一匹はなんなんですか?」

「アレは妖ではない。百鬼夜行が作り出した分身に過ぎぬ。故に誇りを知らぬ出来損ないだ」

「ふうん。じゃ深姫ちゃんヤバくない?」

そんな加弥の疑問に答えたのは風鬼だった

「いや、あの者からは特別な力を感じた。百鬼夜行と似た異形の力を。そして着物の少年からはそれとも違う力を感じた」

「つて言つた男つてよく分かつたね」

「皆は分からぬのか」

何とも緊張感に欠ける会話だった

「つくしー。」

霞はくしゃみをして振り返る。誰か俺の事言つてたな
と思つていると横つ面をおもいつきり蹴られた

吹き飛ぶ俺と蹴る深姫。そしてその間を異常に長い長刀が通過し、
民家を容易く両断する

「霞、よそ見出来る相手だと思つてるの？」

「いいや、ただちょっと大変失礼な事を言つてんじゃね〜かこの野
郎的な波動を感じつー」

言つなり後方に飛び退く。すると頭上から灰色がかつた肌を持つ無
表情の妖が拳を振り上げ落し、民家を粉々に粉碎する

口から漏れる荒々しい呼吸に合わせ体は上下し、ゆっくりと腕を引
き抜く

「・・・軽くヤバイ？」

「ふん、上等よ」

めちゃくちゃ強気の深姫を横目に夢幻に注意を向ける

夢幻は短刀を構え一分の隙もなく百鬼夜行を見据えている

どうやらこの一鬼は夢幻を狙う気はないらしい。非常に好都合だ

「・・・・霞殿、この者は私に任せてもう一つよろしくてどうぞ
か？」

「行けるか？こいつは・・・」

「殺ります。それが私の使命ですので。霞殿も御氣を付け下さい。
前鬼、後鬼は百鬼夜行の分身に近い存在です。故に概念にも殆んど
影響を受けないので厄介な相手に変わりありませんので」

そう言い残し、夢幻は一気に百鬼夜行との距離を詰め右下段から振り
り上げ、踏み込む右足を軸に体を左に捻り脇を狙い強烈な回し蹴り
を放つ

しかし百鬼夜行はストレスで避け、絶え間ない微笑を続けながら霞
達から離れるように後方に飛んでいく

瞬時に後を追う夢幻に俺は叫ぶ

「夢幻！無茶はするな」

夢幻は足を止める。振り返る事無く立ち止まる

「霞殿・・・・」

小さく漏れる言葉は自分自身聞き取れるかどうかも分からぬ程小さな囁きだ

「御安心ください」

振り向く夢幻は微笑む

「私には霞殿を御守りする使命もあります。決して敗れはしません」

背を向ける夢幻は霞に対し深く謝罪し、百鬼夜行を追つため脚に力を込める

「そうか。行つてこい我が友」

息を呑む夢幻は必死な振り返る衝動を押さえた

罪悪感拡がる心中を殺意で被い
震えそうな脚に自負を打ち付け
壊れそうな心に信頼を縛り付け

「・・・・・武運を・・・・・」
「靈

夢幻は風の様にその場から姿を消した

「あれでいいの?」

深娜は油断無く構え問掛けた。その表情には少し陰が見える
「問題無い。夢幻は強い。俺等は出来ることを全力でやるだけだ。

手始めに

懐から取り出す狐面で全てを被い隠す

「ヤー」の「巨」を殺るべ

俺は聞合つを詰めた

「吹つ飛べえええ！」

慎は宙に浮く金鬼田掛け一本足打方の如く黒色の鉄棒を振り抜く金属音に近い音を響かせながら金鬼は再び宙を舞い、派手な砂埃を巻き上げ路面を転がる

「いいね～鉄真丸。俺にピッタリだぜ」

千鶴ノさんが一緒に送ってきた武器の一つ

鉄真丸。物体が物体にぶつかる時、作用反作用が発生する。作用とは物体Aが物体Bに与える力であり、反作用とは物体Bが物体Aに返す力である
しかし鉄真丸は反作用を受け付けない武器なのだ

ようは一本の鉄のハンマーをぶつけ、片方は跳ね返るがもう片方はなんともないといった感じである

「しゃあ金鬼、何時まで寝てんだ。どうせ起きてんだろ」

薄れる砂埃から起き上がる金鬼。しかし体には一切の傷は見当たらぬ
「硬いなちきしじう。鬼ってのは頑丈だな」

「嫌、金鬼のみ与えられたモノだ」

地にあぐらをかき此方を見る穩行鬼。武器も地に置き戦意が無い事

を示している

「我等四鬼、各自に秀でた技が備わっている。風鬼、水鬼は名の如く風と水を操る事が出来る。そして我、穩行鬼は姿を偽る力。金鬼は己を鉱物の如く硬化するのだ」

「つかそんな教えていいのかよ?」

金鬼は埃を払い低く轟く声を出す

「我等は相手に対等で在ることを望む」

金鬼は金棒を構え地を蹴る。代質量の金棒を力任せに振り下ろす
慎は横に飛び退き家屋の壁を蹴り金鬼の上を跳ぶ

金鬼が地に振り下ろした金棒は大地をえぐりクレーターを作る程の
威力を有している

「うおおおお!」

慎は身を捻り高速で回転する。回転で生まれる遠心力を全て金棒に
注ぎ振り下ろす

何かが碎ける音が響く

「・・・・やつべ~」

金鬼は己の腕を盾に鉄真丸を防いだ。鉄に匹敵する硬度を碎く威力
であった。しかし急所かそれに類する決定打に当てねば不利になる
のは自分だ

不意に視界が揺らぎ、続いて異常な衝撃が脇腹に拡がる
痛みはまだ無い。有るのは身体中に拡がる振動

金鬼の一撃は肋を的確に狙っていた。唯一砕けなかつたのは防具の性能と、無意識に行つた防御のおかげだろう。そのまま桟橋を破壊して水路の壁に激突する。そこで初めて痛みが身体中を貫く

「があつ！・・・いつつ。効いたな～」

「まだ立つ。頑丈だな」

「あんがとよ金鬼。どっちもまだ動けるだろ？」

「無論」

慎は飛び上がり金鬼と対峙する。長期戦は避けたい。次の相手は恐らく四鬼でもトップの穩行鬼。

体力を考えれば次の一撃で決めるしかない

金鬼は動き出す。地を蹴り跳躍して右腕に握られた金棒を慎に突き立てる

慎は腰を落とし鉄真丸を居合いの様に構える
脚に力を込め近付く金棒に鉄真丸を抜き放つ

反作用を受け付けない鉄真丸は弾かれない。ならば後は自分の力呑み注げばいい

慎は全力で振り抜いた。互いの武器が音を立てて碎けるのも構わずだがまだ終らない。振り抜いた姿勢を無理矢理捻り更に回転する肋が悲鳴を上げるのを無視して拳を構える

狙つは落ちてぐる金鬼の顎。決めは勝利のみ

「へりつとけえええ！」

己の拳はいとも容易く碎けた。そして相手も又碎けた

加弥はふと空を見る

何かが響いた気がする

そんな気がしたが今は相手のみに集中しよう

指尖に構える武器を相手に叩き付ける

「大手！」

「ぐぬう。ま、待つた！ ちょっと待つた
「待つたな～し！ 勝負に待つたは無しよ」

将棋中だつた

「待て！ 我は将棋たるものを詳しくは知らぬ。しかし『角』が『核』
に成るのは知らぬぞ！」

「此が眞実よ！」

「なぬ！」

茶店に腰掛け対局する加弥と風鬼。そしてその脇では洸夜と水鬼が
お茶を飲みながら和んでいた

「ふむ、そなた等の国はそれ程に豊な社会と技術を有しているのか
「でも此方ほど自然が豊かとは言えませんよ。人工の物も多いです
から」

ズズ～と煤り串団子を口に運ぶ。霞君も呼びたいな～と思ひながら
加弥の方を見る

「ぬぬぬう、ならば此で大手だ！」

飛車をパシンと決める風鬼。しかし加弥は不適に笑う

「甘いわ風鬼！ ここで金が成るのよ」

引っくり返る金は『禁』と彫られている

「飛車禁止！」

「そんな殺生な！」

洸夜はふと思つた

私達何がしたかったんだろうか

頬をかすめる風に舌打をし、下段に構える鎌を振り上げる
しかしそこに割り込む様に灰色の拳が迫る

再度舌打をして攻撃を中断し、身を低くして転がる様に赤黒い肌に
目を覆う黒い布、長剣を持つ前鬼の横をすり抜ける

後鬼は素早く反応し、深娜を背後から追つがそこに俺が割り込む

手に持つ刀は千鶴ノさんから送られた歪刀。鉄としての丈夫さを持
ち、鞭としての柔軟さを持つ奇刀

上段から振り下ろす歪刀を寸前で避け、相手は一旦距離を開ける

「無事か深娜」

「ええ、なんとかね」

乱れた息を整え深娜は小さな水晶を掴む

「・・・・いいわね」

「ああ。チャンスは一度。直撃呑みが狙いの必殺技だ。行くぞ?」

深姫は自分の中に存在する魔力を最大限に放出し、水晶に注ぐ
ガラスの様に透き通つていた水晶は徐々に色を変え蒼く染まっていく
「内に秘めし秘術の心得、霸刻の力を示せ」

俺は低姿勢で地を蹴り、一鬼の背後に回り込む

若干反応の鈍い前鬼は容易く回り込んだが、やはり後鬼は何かを察
したらしく直ぐに飛び退いた

「今だ深姫！」

「総てを飲み込み無を産み出しなさい！狩狂鎌！（しゅきょうがま）」

「

碎け散る水晶から溢れ出す蒼い靄が拡がり形を成していく
蒼白い鎌は形を成し、更に大きく膨れ上がる

前鬼も直ぐに飛び退こうとしたが俺は直ぐに膝裏をおもいつきり蹴
つてやつた

鬼の膝力ツクン

そりやー爽快な気分だった。カクンと傾き膝を付く前鬼

その場を離れて眺めたが凄い貴重なシーンだ

そしてまるで懺悔してゐるような格好の前鬼を飲み込む様に狩狂鎌は
迫り、容易く前鬼を消し去った

ふと空を見る百鬼夜行に身構える夢幻

百鬼夜行は一瞬蒼白く輝いた西の方に目をやる

「今宵の踊り手は愉快だな。今まで以上に愉快な踊りでだ」

「部下が逝ったか。ならば直ぐに後を追わせてやろう」

素早く身を低くして屋根を蹴り背後に回り込み短刀を抜き放つ

しかし百鬼夜行は微笑みを絶やさず踊るよひに連撃を避けていく

「変わらぬな夢幻。あの頃と少しも。やう・・・・・上段の斬は囮」

囮の斬撃の後に放つ回し蹴りを舞う百鬼夜行

舌打ちをする夢幻はクナイを抜き放つ

しかし百鬼夜行は相変わらず微笑み、総てを打ち払った

「変わらぬな。あの頃と少しも・・・・・そうだろ、我等最後の血族にして唯一の妹よ」

「言ひな！裏切りの刻印を持つ者は兄ではない。貴様を討つのは私の使命だ。滅びよ無克！」

夢幻は叫び動き出す

総てを終らせる為に

「なあ隠行鬼さんよ～」

「なんだ」

「いいの?」
「これ

「構わぬ。いつもの事だ。気にするな」

鬼に気にするなと言われるのもどうかと思つ慎。今慎は鬼の秘薬たる薬を頂き完全復活を遂げた

複雑骨折した拳と躰程度で済んだ肋、その他体力氣力まで全て完治している

「対等の立場で闘つが我等の撃だ。怪我人を倒した処で卑怯なだけだ」

「まあいいけどさ。ほんじゃやるかい?」

立ち上がり拳を構える。しかし隠行鬼は別の方を眺めている

「いや、どうやら無克が力を解放するようだ」

「無克? 誰だそれ」

「お主達には百鬼夜行と言つた方が分かりやすからう

「へ～。無克つ つうんだ。初めて知った」

「無克は夢幻の兄だ」

「・・・・・・・・まつたまたあ～」

「よく分からぬが不愉快になるぞその言い方は
「鬼に冷たい視線投げ掛けられた～！」

隠行鬼は慎の事を少しウザツたく感じたとか

拡がる波動

全てに等しく全てに与えられし名の元に

名と言う某の意味を見つめ直せ。全てに存在する名と言ひ力を見つ
め直せ

将棋（？）に敗北した風鬼は突然空を見上げる

「水鬼、これはもしや・・・・・」

「うむ、恐らくは・・・・・厄介だぞ」

そんな一人のやりとらに首を傾げる一人

しかしそんな事を気にする事なく全ては飲み込まれた

「・・・・・これは・・悪夢か?」

「いえいえ、そんな事はありませんよ。あ、足元の石に気を付けて下さいね。転んだら大変ですから」

そそくさと小石を家屋の隙間に放り投げる慎

隠行鬼は非常に困った。先程までと打つて変わつて変になつたいや、元から変なのは百も承知。

一言で言えば変態が変人に変わつたのだろう

「あ、隠行鬼さん、お疲れ様でしたらそここの茶屋で一杯どうですか?」

取り合えず殴つて黙らせる事にした

鬼が一匹、全力で走る

「風鬼！何が起つたのだ！我には分からぬ！」

「右に同じだ水鬼！さては何か失礼な事を言つたな！」

二人の女は全力で走る

「待ちなさい風鬼水鬼！観念して勝負なさい！」

「ちよちよつとどうしたの」「ウちゃん！さつきまで和やかだつたらじ
やん」

「加弥！勝負は常に真剣で油断なんか駄目なんだよ！」

「呼び捨てにされた！」

割と大変そうだった

後鬼と対峙する一人

相変わらず荒い呼吸に合わせ体を上下する後鬼はゆっくりとした動

「霞、あんた大丈夫なの？そんなんで」「ああ・・・馴れたから大丈夫だろ？。しかし深姫、その・・・なんだ。その格好どうにかならんか」

非常に困った。もう男として困った

何故なら深姫の格好は俺のと同じ色の着物なのだが・・・露出箇所が妙にあるのだ

肩の辺りは着崩してし丈は短くてミニスカートみたいだし胸元大胆だし

何より雰囲気が違うのだ。本人は自覚してなくとも見えないフェロモンが放たれているのだ

「仕方ないでしょ。名前がそうなるんだから」

今俺達は百鬼夜行の概念下にいる。名前が力を持つ概念
深姫の場合、深は深いや奥底を意味するが姫はなまめかしい、女性としての色氣等を意味するのだ。迷惑この上ないな

「煩いわよ！」

改心のビンタを受けた俺は無散する

白い煙の様に散つた俺は直ぐに元に戻る

「おい、一応痛いんだから止めろよな。集中しないと戻らないんだから」

霞としての力を持った俺はどうも居心地が悪い。先程みたいに飛び散るし集中しないどんどん広がっていく感じになってしまふ
「取り合えず後鬼を片付けますか。ほいじや深姫、ちょっと失礼」

俺は左腕を深姫の方に向ける。すると腕は次第に霧状になり深姫を包み込んでいく

「ちょっと、何よこれ」

「靈の力だよ。靈つづりの物を隠し包み込むつづり意味もあるんだ。ついでに言えば俺一人で十分だから加弥達の方を見ててくれ」

俺は見えない何かを掴み後鬼に向ける

「名前が力を持った時点で俺の勝利は決まつたんだからよ」

深姫は溜め息をつき背を向ける

「さっさと帰つて来なさいよ」

「了解」

俺は力強く踏み込み見えない武器を振り抜いた

広がるのは夢見た景色

遠く彼方に忘れ去られた幻の一辺

「…………は…………」

確かめる様に見渡すと風情ある造りの部屋に囲炉裏の前に腰掛ける

套綴

「ん？漸く起きたか。わしが来ても寝ておるとは珍しいな」

「套綴……殿」

「何を呆けておる。お前らしくあるまじて」

豪快に笑う套綴はあの頃と少しも変わらない

内に秘めた鬼神の^ビとき迫力も。部下思いで何処か安らぎを感じる優しさも

「悪い夢でも見たか？少しうなされてたが」

「・・・ゆ・・・め」

「はつはつはつ、こりや愉快。こんなお主を見るのは初めてじゃ」

膝を叩き笑う套綴は茶を煤る

「套綴殿、無克は何処に居ますか？」

「無克か？お主そこまで呆けたか？さつきから主の後ろにあるだろうが」

夢幻は焦りながらも直ぐに振り向く。そこには相変わらず微笑んだ無克が立っていた

「我に用か夢幻？余りにも愉快でつい眺めてしまつたぞ」

無克は囲炉裏の側に歩み腰を落とす

「しかし夢幻に呼び捨てにされたのは些か悲しいですな」

「お主は威儀が足りんのだろうに。いつも笑つてばかりで」

お互い声をあげて笑う。そんな光景を眺め夢幻は思つ

本当に夢だったのではないか。今見てる世界が真実ではないのか

強く優しい套綴殿がいて
いつも笑顔の兄がいて

郷には同士がいて

「兄上。 套綴殿・・・・・」

夢幻は静かに眼を閉じる

俺は右腕をスッと動かし後鬼の横をすり抜ける

後鬼の腕からは鮮血が吹き出し低い呻き声をあげる

「どうだ？ 見えぬ武器ほど避けづらい物はないだろ？ もっとも見えぬのは武器だけでは無いがな」

うつすらと水気を帶た歪刀を軽く振ると音もなく景色に溶けこんだ
「見えぬ刀と聽こえぬ音。どうだ、こんな相手は初めてだろ？」

後鬼は叫びをあげ恐ろしい速さで拳を振り下ろす
「無駄だつてまだ分からないか？ 学べよ鬼」

的確に俺の頭を捕えた鉄爪は虚しく空を斬る

無散する小さな水滴は後鬼をすり抜ける形を成す。そして残された後鬼は身体中から血を流し膝を付いている

「無駄だ後鬼。言つたろ？名が力を持った時点で勝利は決まつたんだから。考える後鬼。何故俺が一人でいいと言つて深姫を返したか」

忍笑いの後諭す様に語りかける

「理由は二つ。一つは単純。女性に血生臭いことは見せれまい」

屋根の上に飛び移り後鬼を見下ろす

「名前が力を持つ。名前とは別に一人一つではない。俺にはもう一つの名があるんでね」

澄んだ空気に指を弾く音が拡がる

「私は今を生きる魔王なり。疑い物の鬼よ。今一度土に戻れ。新しき世界が産まれるその時まで」

静かに空間が碎けた

。

そこには何も無い。何も存在しない

「もう一つの理由はやはり単純」

屋根に立つのは真紅の瞳に後ろに伸びる長く鋭い角。蒼の着物に不釣り合いの漆黒の羽

「こんな姿は見せれないだろ？いくら俺の魔王に対するイメージの姿でもさ」

魔王は月の輝く空を駆けていく。友の元へ

「夢幻、どうした？」

「兄上。私は夢であつて欲しいと私は何度も思つた
ゆつくり眼を開け兄である無克を見据える

「夢の事か？どんな怖い夢を見たのかは分からぬが安心しろ。私は
此処にいる」

昔と変わらぬ微笑みは眩しかつた

「そうだ。兄は此処にいる。だが其処にはいない。そうであらう無
克」

拡がる景色は月夜の世界

「夢幻・・・・何故だい。何故醒めてしまつたんだい？」

「私の名は夢幻。夢とは儂い存在。幻は実体が無いもの。そして私は逃げていたの。受け入れたくなかったのだ。現実を」

「何故だろうね。何故受け入れたんだい」

胸に突き刺さるクナイをゆっくり引き抜き無克は問掛ける

「私は今まで主は主として見ていた。主の為に命を捨て、主の為に己を捨てていた」

一瞬で十数のクナイを無克に放つ。直ぐに引き抜いたクナイで弾くが傷は更に増える

「だが今の主は私を友と呼んでくれた。初めて友と呼んでくれた主だ」

金色に輝く瞳は兄を見据える。無克は乱れた呼吸をゆっくり静める

「私は主の為に命を捨てぬ。主の為に生き続けてみせる」

無克は微笑みむ

「夢幻。我等最後の血族よ。そなたは遅しなった。よくぞ我を止めてくれた。力に呑まれし堕弱の兄を」

月夜に笛の音が鳴り響く

透き通る音は歓びに満ち、哀しみに震えていた

「兄上……」

透き通る音は響き渡る

そして溶けて消えていく

「我が最後の血族の主よ。聞いているか」

空に語りかける

「我に眠りを『え』てくれるだらうか。安らぎを『え』てくれるだらうか

「……氣付いていたか百鬼夜行」

「我は夜歩む悪しき鬼なり。氣付いて当然。我より悪しき者よ」

ゆっくり地に降り立ち夢幻の鱗に立つ

「俺はお前に眠りを『え』れるだらう。しかし安らぎを『え』る事は出来ぬ。違つか？」

「だからこそ願いしたいのだ。償いの時を頂きたい。それが我の最初にて最後の願いだ」

夢幻は兄に背を向け空を見上げる

「霞殿。私からもお願ひしたい。兄に……眠りを『え』はくれないだろ？ か」

震える体を必死に抑え、夢幻は俺に微笑む。全てを背負い、その全てを笑顔の内側に封じ込め

「分かった」

俺は空に向かって指を弾いた

「兄上、急がれよ。套綴殿が御呼びだ」

「そうせかさないでくれないか？これでも急いである」

屋敷の屋根を飛び渡り、兄妹は主の元へ向かう

妹は急かす様に兄の袖先を引き、兄は相変わらず微笑んでいる

「私は幸せか？」

無克は己に問う

「当然だ」

己は無克に返す

兄妹は主の元へ向かう

夜が明け太陽が町に射し込み

「御世話になりました霞殿。私と兄を救つて頂き誠に感謝しております」

深々と頭を下げる夢幻は笑っている。作り物の笑顔ではなく、心から笑ってくれた

あの後皆の元に戻ると割りと大変だった

加弥はふてくされて隅でイジケており、洸夜が必死に何か話しかけている

「何したんだあの二人」

「洸夜さんに呼び捨てにされてイジケてるのよ」

「ああ。洸つて水が拡がるって意味で洸洸で勇ましいって意味だか

らな。名前に少し呑まれたんだろ」「

視線をズラすと三鬼が深娜から視線を必死に反らしている
大方深娜のフェロモンに負けたんだろうな
隠行鬼は慎が目を覚ます度に殴り倒している
無視しよう

それから夢幻は四鬼を従え郷に戻ると言った。残り少ない時間を兄
と姫綴と共に暮らした屋敷で過ごすそつだ

「霞殿。時間が迫っております。後少しで異界の門が開きます」

最初に降り立つた巨木は渦を巻くように歪み闇の門を造り上げる

「夢幻、これで主と家臣の関係は終りだ。違つか?」
「・・・はい。多々御迷惑を御掛けました」
「ふむ。漸く互いを友として呼べるな」

俺は懐からナイフを取りだし夢幻に渡す

「受け取つて貰えるかな?我が新たな友よ」

夢幻はゆっくりナイフを受取り、代わりに己のクナイを取り出す

一瞬夢幻の瞳が金色に輝き、クナイに指を滑らせ文字を刻む

「夢靈^{むか} たとえ夢靈であつても集まり靈と成す」

夢幻は「己」の髪を少しきり、クナイに縛る

「己」の世界を出るまでは付けて頂けるだらうか。友として願いたい

俺は笑い受け取る

「生涯いかなる事が有りつと外す」とはしない。それが友の願いと
聞き受けた

互いに背を向け歩む

「また会おう我が友よ。いずれ輪廻の行く据えで会える事を」

「また会える事を願いたい。転生の先に彼方が居ることを」

闇の門は音もなく消えた

影で頑張れる人程強い人？（後書き）

いかがでしたでしょうか？楽しんで貰えたら幸いです
今回で R P G は一区切りです。以前感想を書いて下さった方に大変
心配して頂き決意しました

それではまた何処かでお会い出来ることを

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7809a/>

一步先からヤミ【集えぼくらのあーるぴーじー】

2010年10月9日18時34分発行